

41627

教科書文庫

4
810
41-1926
20000 96672

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

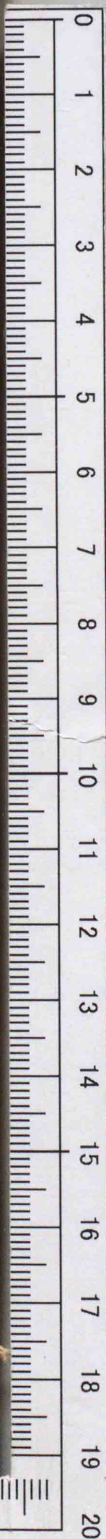
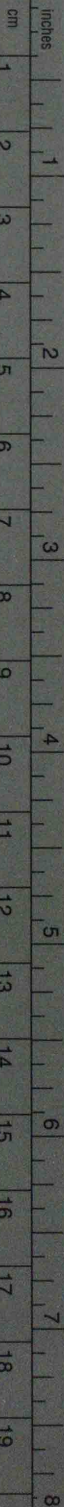


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
215

中等國語讀本

新修版

卷二

日七十月二年五十五正大
濟定檢省部文
用科語國校學中

中等國語讀本

落合直文編
金子元臣補



社會式株
院書治明

資料室

40
810
文15

目次

一 伊能忠敬の晩學その一……………幸田露伴……………一

二 同……………その二……………同……………七

三 茶碗の茶……………南條文雄……………三

四 秋二篇……………

 一、屋内煙草畑……………前田夕暮……………一五

 二、竹林の秋……………北原白秋……………一八

五 朝鮮雜感その一……………芳賀矢一……………二〇

六 同……………その二……………同……………二六

七 豊太閣……………矢野文雄……………三

八 史傳を讀むべし……………大町桂月……………三九

目次

九 境 遇(格言).....四

一〇 大海の日出..... 德富蘆花 四

一一 大海原(新體詩)..... 坪内逍遙 四

一二 近江聖人..... 橘 南 谿 五

一三 同 情..... 坪内逍遙 五

一四 諭言五則..... 那珂通高 三

一五 深秋の感興..... 吉田絃二郎 六

一六 大森閑話..... 杉村楚人冠 七

一七 少年行..... 中村星湖 七

一八 兔 狩..... 德富蘆花 七

一九 生存競争..... 丘 淺治郎 八

二〇 忠君愛國..... 芳賀矢一 九

一〇二 日本海の海戦..... 矣

一〇三 機智縦横..... 一〇六

一、百人一首の對句..... 一〇六

二、春水の羽織..... 一〇七

三、姨捨山の月..... 一〇八

一一三 宇宙の富..... 德富蘆花 一〇九

一〇四 觀察と實驗..... 小酒井不木 一一三

一〇五 わが幼時..... 新井白石 一一五

一〇六 一燈錢..... 久阪元瑞 一一三

一〇七 吾輩は猫である..... 夏目漱石 一一五

一〇八 邯鄲夢..... 松 井 等 一一三

一〇九 小 鳥..... 吉田絃二郎 一二四

三〇	流行火事その一	久米正雄	一四
三一	同	同	一五
三二	京都の春	大和田建樹	一六
三三	ただの人(今様)		一六
三四	安宅	坪内逍遙	一七

(終)

國語假名遣一覽

附録

中等國語讀本 新修二版 卷二

一 伊能忠敬の晩學その一

忠敬
東河と號す。
通稱勘解由。
下總國武射郡
小堤村神保倉
恆の子。文政
四年歿す。(二
四〇五年—二
四八一年)
圓一円

忠敬、年十八にして伊能氏の養嗣となり、五十歳にして家をその子景敬に譲るまで、みづから抑へて平平凡凡の人となり、一意専心ただ伊能家の衰へたるを興し、おのが任務を最も圓滿に、最も麗しく果さんことを期し居たりき。

およそ才氣ある者の常として、おのれが欲せざる事には、一舉手一投足の勞をも吝み、單に己が欲する事にのみ身を

をる(折)

榮一榮

委ねんとするは、免れがたき習なり。たとひ己が欲せざるこ
 となりとも、甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へて、わが爲
 すべき事をなすは、その人當に才氣あるのみならず、また徳
 量ある人といふべきなり。
 世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある人は少し。年
 少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刀の肉薄きが如し。
 物を截ることはよくすべし、折るる恐は免るべからず。され
 ば、世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢す
 る例は、數へも盡しがたし。忠敬が算數、曆術の學を嗜み、且こ
 れをよくすべし資を抱きながら、みづから甘んじて市井の
 凡人に伍し、伊能氏を繼ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし

といふを唯一の望として、三十餘年一日の如く、ひたすら家
 業に丹誠したるが如きは、實にその徳量の大きいなるを見る
 べきなり。



伊能忠敬

かくの如くにして伊能家は興
 りぬ。景敬は家を繼ぎぬ。一家の事、
 また憂ふべきものなし。忠敬が伊

能家に對する義務は、茲に於いて
 圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は初めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠
 敬の自由に用ゐることを得べし。この時は忠敬年既に五十
 歳、常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心

うれふ(憂)

老い。

佐原
千葉縣香取郡。

の壯なる人には、何歳の時も前途多望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合もわが力を試みるに足るべきなり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當りて、初めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。

さるほどに、忠敬はその郷里佐原を出でて江戸に來り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一様の、笈を負ひて郷關を出で、都門に遊びて師を尋ぬる書生と異なるところは、唯その若きと老

曆法改正
寛政九年に成る。寛政曆と稱す。

高橋作左衛門
名は至時。寛政七年幕府の曆官となり、寛政曆を作る。文化元年正月歿す。(二四二四年—二四六四年)

いたるとの差のみ。かくて忠敬は、身をおのが好める學に委ねたるが、おのが満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。をりから、幕府には曆法改正の舉ありて、これがため、特に大阪より高橋作左衛門といふものを召されたり。作左衛門は東岡と號して、算數、曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して、直に師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十一歳にして、東岡は三十一歳なりき。普通の人情にては、おのれより年若き人に會ひては、たとひおのれが學業などその人に及ばずとも、なほ強ひてみづから高ぶり、あへて頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は流石にさる事なく、喜びてその門下生となれり。然れども同門の學生

等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば
屢笑柄となしたりといふ。

晩學の難きは、實にいつの世にありても、かかる嘲笑の存
するが爲なり。ここを以て非凡の士にあらずば、大抵みづか
ら恥ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を
抱いて墓穴に入るに至るなり。元來、老いて學ぶは、たまたま
その志の淺からざるを顯すに足るのみ、また何の不可かあ
らん。況やまた何の恥づべき所かあらん。思ふに、區區たる群
小の嘲笑も、忠敬においてはただ蛙鳴、蟬噪を聞くが如くな
りしならん。かかれれば、忠敬と同門生との優劣勝敗は、比較す
るまでもなく明なることなり。忠敬の學術は、さながら堤防

顯顯

きはむ(窮)

の決潰して、洪水のおし寄するが如き勢を以て歩を進め、終
にその學の蘊奥を窮めて、東岡門下に肩を比すべきものな
きに至れり。

二 伊能忠敬の晩學その二

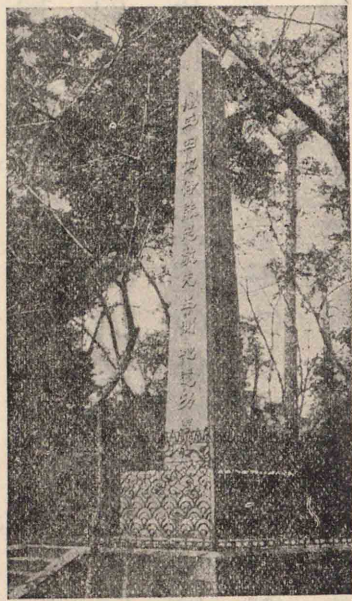
大阪城番同心
大阪城番に屬
する輕輩。

高橋東岡に就いて、又面白き一佳話あり。東岡はもと大阪
城番同心とて、輕輩微祿の士なりき。家に大いなる柿の樹あ
り。秋毎にその實を沽りて、僅ながらも生計の一助となせり。
東岡常にわが家の家根に上りて、星の纏度を測る。柿盗人の
來りて庭に入るを認むるや、東岡家根上よりこれを逐ふ。か
かる事度度なり。一日公務を終へて家に歸りけるに、かの柿

勞—勞

の樹、斧もて斫りしと覺しくて、根本より打ち倒れたるを見、忽ち勃然と怒りて、「何者の所爲ぞ。家のものも亦これを知らでやありける。心得難し」と大喝しけるに、その妻前み出でて、「そはわが斫らせしなり。怪み給ふこと勿れ。君が平生公務の傍身を疲らせ心を苦めて學事に努め給ふは、必ずその道によりて名を揚げ、家を興さんと思ひ給へばなるべし。志ありて事の成らざること蓋し少し。只君の爲に憂ふるは、君が學事に心を盡し給ふことの足らざらんことのみ。然るにこの秋に當りて、僅なる柿の樹の爲に用なき心を勞し給ふ、いかにもくち惜し。柿盜人は柿のあらん限絶ゆべからず。この樹だになくば、柿盜人も來らじ。柿盜人來らざれば、君も心を動

實—実



伊能忠敬記念碑

の夙成、忠敬の晩學、これの弟子となり、かれの師となる、天意實に奇といふべし。

忠敬が東岡門下に在

るや、常に觀測實習に従事し、後には外出を厭ひ、午中は太陽の觀測を、暮後は星辰の觀測を毎日の仕事とし、曇天雨日の外は、悠悠として人と對話することなかりき。東岡先生の許

に曆理を攻むる時、測らず時を移して黄昏に至れば、倉皇狼狽して、履物を逆にして辭し去る。爲に脇差、懷中物などは置き忘るること度度なり。性急なる氣質の如く見ゆるも、その實は觀測に熱心なる餘に出でたるなり。故に師の東岡もその根氣に感じて、戲に推歩先生と忠敬を稱へたりき。推歩先生、何ぞその渾號の佳なる。

かくて、忠敬がはじめて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實に五十六歳の時なりき。五十六歳といへば、人は暮齡用ゐるに堪へずとする年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて喜色滿面に溢れ、即日にも

號一号
測量の命を蒙る
寛政十二年、
はじめて北陸
道および蝦夷
地測量の命を
受く。

出發せんとする勢ありきといふ。

抑、幕府にてわが邦の地圖を製せしは、正保及び元祿の兩度にして、村郷、里程まで記入したりといへば、稍精密なるもの如くなれども、皆これ眼見、足踐によりて製したるものなれば、實に信憑すべき價值あるものにあらず。名は地圖とこそいへ、經緯の度だになき漠然たるものにして、殆ど旅客の見取圖、兒童の想像畫に侔しきものなりき。然るに、この忠敬の實測著手は、わが邦をして始めて地圖らしき地圖、否信すべき國圖を有せしむる端緒なりしなり。

爾來春風秋雨十有八年、山海を跋涉し、事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、寒暑に辟易せず、風濤に逡巡せず、晝は終日

正保
後光明天皇の
御代の年號。
元祿
東山天皇の御
代の年號。

驛一駅

長汀極浦に測量機を取つて往來し、夜は寒村孤驛の客舎に、一穗の燈下、幾人の助手と共に、頭を鳩めて運算をなし、製圖をなし、孜孜屹屹、深更に至つてわづかに眠に就きたりといふ。かくて日本沿海の測地を終了して、製圖の完成に全力を注ぎ、文政元年七十四歳を以て卒去せり。

かかれば忠敬はその身體も極めて頑健ならんと想はるれども、實際は然らず。壯年時代も往往枕に親み、測地事業開始後も、屢病魔の襲ふ所となりて苦めりといふ。只その勃勃たる元氣と、燃ゆるが如き熱心とは、遂にこの大事業を成就せしめたるなり。誰か日本人を早熟早老の人種といふ。これ豈我に伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。

幸田露伴

文學博士。名は成行。東京の人。慶應三年生まる。小説家として尾崎紅葉と並び稱せらる。嘗て京都帝國大學講師たりき。

(幸田露伴—伊能忠敬による)

三 茶碗の茶

嘗て一人の書生があつて、有名な禪僧渡邊南隱の草庵を訪うて、教を請うたことがあつた。一體教を請ふには、それぞれ作法のあることで、むやみやたらに議論をするのではな

い。處がこの書生、元來南隱をいひ込めて困らせようといふのが目的であるから、大きな聲で、何の彼のと大いに理窟を並べ立てた。しかし南隱はそんな事にはとんと構はぬ。通常人に對する時と更にかはりはない。まあ茶でも一杯飲むがよいといふ鹽梅で、茶碗に茶を注いで進めた。書生はそれを

渡邊南隱

臨濟宗の名僧。岐阜縣の人。東京に住す。明治三十七年寂す。(二四九四年—二五六四年)

鹽一塩

一口飲むか飲まぬに、益聲を高めて議論を試みるのであつた。

さうすると、南隱が急須を取つて、そのまだ飲み盡さぬ茶碗の中へ又茶を注がうとした。書生は議論中であつたが、あわてて、「いや、もう澤山です。こぼれます、こぼれます」といふと、南隱その聲に應じて間髪を容れず、「邪心うちを充てり、理も亦入らず」と云つた。

書生は面白半分に、からかひにやつて來たのであるから、忽ちその脚下を見透された。これは、お前の心に邪曲な考が一杯充ちて居る以上は、たとひ、どんな高尚な道理を話して聽かせた處が、それは何の益にも立たない、眞實の心でなけ

からかふ。

れば、決して何事でも身に徹するものではない、高尚な道理といふものはそんな口先ばかりの議論ではない、誠にこれは憤まねばならぬとの謂である。流石の書生も、これには如何にもと恐れ入つてしまつて、頭を下げたといふ話である。

(南條文雄—佛教人生觀)

南條文雄
文學博士。帝國學士院會員。岐阜縣大垣に生まる。眞宗大谷派の僧侶。

さはり。

四 秋二篇

一、屋内煙草畑

私は手ざはりの粗い藺筵の上に、仰向に寝てゐる。私の上には、青青と一面に葉煙草が釣られてある。畑に立つてゐるままの姿で、皆梢を下にして、幅の廣い橢圓形の大きな葉と

爐一戸



煙草の耕作

葉と重なりあふ程に、ぎつしりと逆しまに立つてゐる。空から煙草畑を視おろしてゐる形である。朝眼が覺めると、まづ青青とした視野のかぎり、私の顔の上に廣い煙草畑がある。立ちあがると、梢の天葉てんばが頭に觸りさうだ。座敷から板敷の間に、板敷の間から土間へ、一面の青煙草畑である。ただ圍爐裏の上や、土間の隅の竈のあるあたりが、もう薄黄いろく枯れか

Lamp ランプ

けてゐる。私の郷里では、七月末あたりから八月にかけて、畑から煙草を刈り取つて來て、どの家でもみな梁につるす。これを木がらしといつてゐる。

私達はこの屋内煙草畑の下に棲んで、そこに寢、起き、働き、そして掘抜井戸から溢れ出る冷い水を飯にかけて、青い胡瓜の漬物で、さらさらと水飯をたべた。

夜は夜で、この煙草畑の下にランプをつるして、うす暗い光を紙面に反射させて、なつかしい石油の匂を嗅ぎながら、よく讀書した。どうかすると、煙草の葉についてゐた青蟲が、ほたりと私の本の上に落ちることもある。

馬追が水つほい音いろで、部屋の隅に釣つてある蚊帳の

前田夕暮
歌人。名は洋
造。神奈川県
の人。明治十
八年生まる。

豊—豊

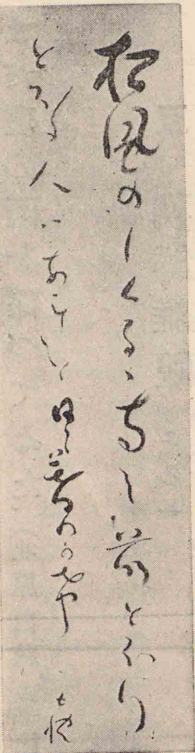
釣手にとまつて啼く。もう秋が山麓の曠野にきてゐるのである。(前田夕暮—緑草心理)

二、竹林の秋

この頃は雨ばかり降りつづいた。私はまた竹林の雨ばかり眺めて暮した。竹の葉は雨がかかると、愈緑が冴えて来る。雨あがりの夕方などに、空が紅く匂つて来る頃の、この竹林の冴は實に明るい。孟宗は葉がこまかで、枝垂が豊である。ゆゑ、愈緑が明るく光澤を帯びて来る。ひえびえとして見えるが、かうした雨に濡れた竹の葉は、實にまた繊細なそよめきを、さながら風の象として示す。

震災當時には、前の竹林を私達は食堂にし、應接室にし、書

齋にし、寢室にした。竹の幹には八角時計も掛け、青銅の小さな佛の顔も掛けた。それらの竹の根には、曼珠沙華が赤く咲き盛つた。裏の竹林にもまた曼珠沙華がその華曼をかざしてゐる。だが、昨日今日の長雨で、可なり色が褪せて来た。



北原白秋筆

東の竹林を
抜けて隣の道
に出ると、その

雨—雨

別荘道の兩側は、萩が末になつて、絲薄の薄紅い穗でうまつてしまつた。薄の穗の揃つて波うつ風情は、野趣があつていい。これ程の薄の中道は珍しい。丘の上まで續いてゐる。海の上には、雨雲が軟い夕焼で赤くなつてゐた。その夕焼

にじ(虹)

臺—台

の中に、強い濃い紅と黄との二重虹の、しかも幅廣い脚の裾だけが眞直に降りてゐた。雲と虹との上には、ほのかな、稍乳色をかけた青空があつた。その二つの虹の間にはまた、丘の下の鉾杉が二三本、深い青天鷲絨の臺傘を立てて、しつとりとまだ殘の雨を保つてゐた。(北原白秋—季節の窓)

五 朝鮮雜觀 その一

グリフィス
明治の初年
日本御雇教
師たりき

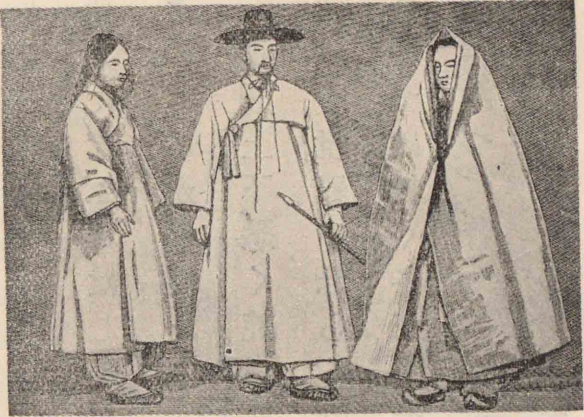
「ミカドの帝國」を書いた亞米利加人グリフィスは、朝鮮を「仙人國」と呼んだ。この仙人國も、今は我が大日本の新領土となつて、一千萬餘の仙人も、皆我が新しい同胞である。仙人も段段俗人の仲間入をして、活動して貰はなければならなく

たづさへ(携)

なつたが、黒い冠をかぶり、白い衣を著て、悠然として市街をあるいて居る朝鮮紳士の風采を望めば、如何にも仙人らしい容子が、今でも見える。人毎に長い煙管を携へて居るのは、仙人にはふさはしからぬやうに思はれるが、この長い煙管そのものが、優長といふ感を一層強からしめるのである。

貴賤上下、悉く純白な著物を纏うて、見渡すかぎり眞白なのは、全世界中恐らくは朝鮮ばかりであらう。夏だからさうなのでは無く、冬でもやはり同じである。これには一つの傳説があつて、昔ある王様が父王の死を悲んで、始終喪服を著けて居られたので、人民が皆これに倣つたのだといふ。一應聞けば尤らしい殊勝な話であるが、この傳説は無論作事で

變一変



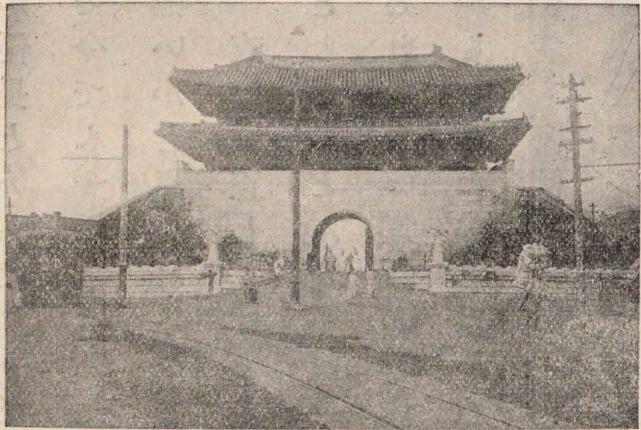
朝鮮風俗

あらうと思ふ。何處の國でも、古い時代には眞白な著物が流行つたが、そのうちに色色の染色や、縞や、飛白の衣裳が行はれた。文化の他の方面が種種に變化を受けたにも拘らず、純白の衣服が數千年の後までも行はれて居るのは、實に不思議といはねばならぬ。萬事萬端、支那を崇拜した國として、この國俗を變へなかつたことも、考へれば面白い事である。

子供は折折、桃色や萌黃や藍色の著物を著て居る。それも

もえぎ(萌黃)

今昔物語
源隆國の著と
いふ六十卷。



京城南大門

全部同じ色で、日本の娘の兒のやうに、美しい花紅葉の染模様では無い。婦人もまま、紅色、萌黃色の衣を著けて居るが、模様や縞は少しも無い。殊に、婦人が「長衣」といつて、我がかつぎのやうなものを著て、目ばかり出してあるいて居るのは、日本の古代の風俗その儘で、服制に多少の相違こそあれ、大體に於いて古い繪卷物を見るやうな心地がする。低い屋根の下で眞桑瓜などを食つて居る容子は、何處と無く今昔物語を

まのあたりに見るやうである。現在の生活に於いて、朝鮮人が優長といふばかりでは無く、朝鮮の歴史そのものが優長で、今でもやはり、そろそろと昔の歴史が流れて行くのでは無いかと思はれる。

衣冠を正しくすることは、隨に朝鮮人の一美風であるかとも思ふ。どんな卑賤な人でも、滅多に肌を露すことは無い。これは寒い氣候の關係から、自然習慣となつた所以もあるかも知れぬが、とにかく素肌を人前には出さない。支那の労働者も、身體の上部こそあらはせ、腰から下は出さないが、朝鮮人は肌を脱いで居るのは終に一人も見なかつた。

朝鮮人は雨具を用ゐぬといふことは、かねて聞いて居つ

あらはす(露)

舊一旧

Silk hat シルクハット

た。今は田舎でも、蝙蝠傘を手にしてあるいて居る人を見受ける。それよりも不思議に感じたのは、雨降の時に、冠の上に小な傘を載せて居ることである。竹の骨で、油紙を張つたものである。成程、日本の傘はこれを大きくしたものだなと感服した。又、頭に雲水坊主のかぶるやうな、深笠の大いのかぶつてあるいて居るものが往往ある。あれは何かと聞けば、喪中の人で、喪中は一年、二年、三年、必ず常にあの笠を著けて居るといふ。如何さま、舊い禮儀はやかましい處だ。朝鮮、支那、土耳其、皆それぞれの冠物を今にも保存して居る。日本人は古い物を保存して居るが、新しいものは又何でも用ゐる。洋服に下駄も履き、紋付の羽織にシルクハットもかぶる。

六 朝鮮雜觀 その二

朝鮮人の物を運ぶのは、男は背で、女は頭である。男の背には、例の支繫チキといふものをかけて、一切の物をそれで運ぶ。八百屋が唐茄子や胡瓜を賣るのにも、背に負うて來るので、日本のやうに、天秤棒で兩端に擔ぐことは無い。すべてが山に柴刈に行く昔話の爺さん式である。女は洗濯物でも何でも頭に載せて行くので、これは京都の大原女式である。しかし大原女のやうに、張板や梯子などをついであるくのは見受けなかつた。

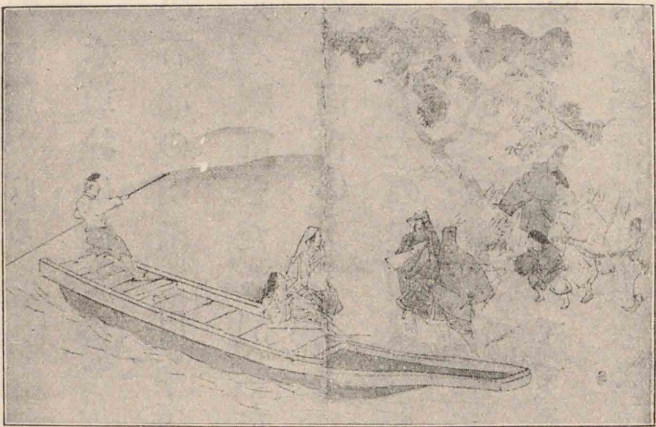
大原女
京都の北、八瀬大原邊より
京都に物賣に
くる女子をい
ふ。

朝鮮には虎が居る。竹に虎といふから、竹も澤山ありさう

灣一灣

繩一繩

るなか(田舎)



平安時代風俗

に思ふが、竹は少い。これは氣候のせりである。竹の簾や扇子や竹細工もいくらかあるが、概して日本のやうに、竹を種種の工業には使つて居らぬ。南の新領土臺灣は竹の名所で、唐竹眞二つ割で天秤棒の代にしたり、竹で船を作つたりして居るが、京城では竹竿一つ見附からぬ。洗濯物を干してあるのを見ると、大抵繩にかけ渡してある。又田舎などでは、丘の上

にひろげて並べてあるだけである。桶、盥のやうなものにも

竹の籬たがは無い。竹の無い所へ行くと、今更に竹の效用の廣いのに驚かれる。

水道栓の側で水を汲んで居る朝鮮人を見ると、皆ブリキの石油の空函を用ゐて居る。如何にも手がるて無造作に見える。瓢箪をたち割つたものが水を汲む杓子であるのは、古風で面白い。

朝鮮人の履物は、男も女も一種の靴であつて、日本のやうな下駄、足駄は見當らぬ。靴の下に足駄の齒の附いたものがあるが、鼻緒を立てて、その鼻緒を足の指にはさんで歩くといふ藝當は、日本人より外には出來ぬのであらう。

朝鮮の家屋は如何にも小さく低くて、粗末に見える。京城に

はさすがに瓦葺の家も見えるが、田舎は殆ど藁屋ばかり、その藁の葺方が日本の如く綺麗に端をそいでないため、ただ藁を打ち懸けたやうに見える。柱なども細く短くて、あら削のや、自然木そのままのものもある。寒さを恐れるため、窓が少いから陰気で、日本の田舎家のやうに、からりとして居らぬ。日本のは小さくても汚くても、からりとおつ開いて居る。あれでは夏はさぞ暑からうといへば、日が透らぬから割合に涼しいとのこと。床は土で、その下が温突をんぞつで、冬は火を焚いて暖めるのである。元來朝鮮では、庶民には二階建三階建を禁じたのである。それ故、庶民の家は皆低い。地に這つて居るやうである。又、家をあまり立派にすれば、金持と認められてすぐに

大院君
名は李昪應。
李太王の生
父。明治三十
一年薨す。(二
四八〇年—二
五五八年)
爲一為

諸税を取り立てられるから、金持でもわざと外觀を汚くして居たやうな原因もあらう。併合後新築する鮮人の家には、段段と二階造の高いのも出来るさうである。それに比べれば、王宮は比較にならぬ程規模も大いし、立派である。就中さきの王宮景福宮は、大院君の造營せられた宮殿で、幾多の宮殿樓閣が相連つて廣いものである。これを造る爲には、民の疾苦をも顧みず、人頭税までも課して造り上げたといふ。いはゆる民の膏血を絞つて築いたので、この宮殿が即ち李朝に崇つたのだといはれて居る。

この宮の正門興化門前の通などは、幅六十間、東京にも滅多に無い。現王宮昌徳宮も拜觀したが、これは近世の洋風に

ソファ
Sofa
けづり(削)

塗り替へ、西洋の椅子、ソファなどがあつて、面目が改つて居る。建築には丹碧を塗り附けてあるばかりで、材木の削方、仕上方は日本のやうに立派で無い。一體に樹木の少い京城に、昌徳宮の裏の祕苑だけは、流石に老樹が生ひ茂つて居る。しかし何等林泉の美としては無い。小い溪流の石に題した句に、飛流三百尺、遙落九天來とあるのには驚いた。

朝鮮人は怠惰で、労働を嫌ふといふが、農業に精を出して働いて居るのを見ても、決してなまけるばかりの人間ではない。朝鮮の山を禿山にしたのも、長煙管をくはへて、悠然として南山を見て居る白衣の民を作つたのも、皆古來の悪政の罪である。苛政は眞に虎よりも猛である。

悠然として云
陶潛の句に
「菊を東籬の
下に採り、悠
然として南山
を見る」。

苛政は云云
禮記に「苛政
は虎よりも猛
し」。

愛すべき我が一千万の新同胞は、今や仙人の生活を次第にはなれて、嬉嬉として我が聖天子の德澤に霑ひつつあるのである。(芳賀矢二)

七 豊太閤

古人景仰すべきもの甚だ多し。豊太閤の如きその一人なり。事業の宏壯、施設の警拔、氣宇の洪闊、度量の廣大、千古絶倫といふべし。公の事業施設は、後世或は得て學ぶべし。その氣宇、度量に至りては、殆ど望むべからず。公の人となり、を想ふ毎に、襟懷の爽然たるを覺ゆ。

わが邦に未曾有なる應仁以來百年の大亂を定め、武威は

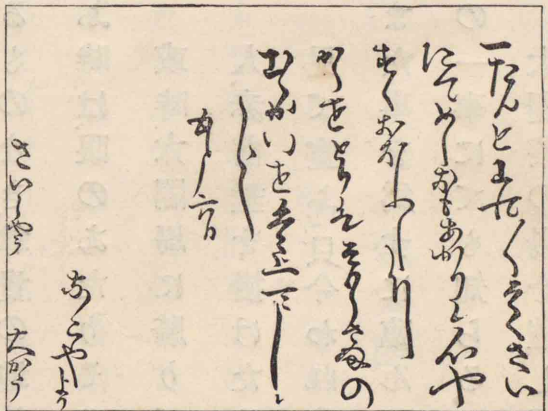
異域をも震動せしめ、天下懾服して、又一人の頭首を擡げ得るものなき、尊貴の地位にある人として、左の一事あるを想ふ時は、眼のあたりその人を見るが如き心ちす。

或時、太閤馬に騎りて烏丸通を參内す。新在家の下女四五人、赤前垂を掛けたるが、立ち出でて見物す。太閤馬上より見て宣ふ。只今われ内裏にて能をすべし。皆皆見物にこよ。また事を爲すに臨んで奇警迅速一點も容態ぶらざるは、左の一事にても知らる。

太閤茶の湯を催し居給ふ處に、佐久間が中川を討ちし注進きたる。太閤その座より裳をまくり、えいやえいやとて馳せいで給ふ。御馬廻衆は追追に追ひつき奉る。

佐久間が云云
佐久間盛政が
中川清秀を破
りしにて、天
正十一年賤が
嶽の戦の時な
り。

而して、盛装の行列には唐冠を冠り、鬚を附くるなど、その容態ぶれる有様また面白し。蓋し、唐冠を冠るは信長の真似



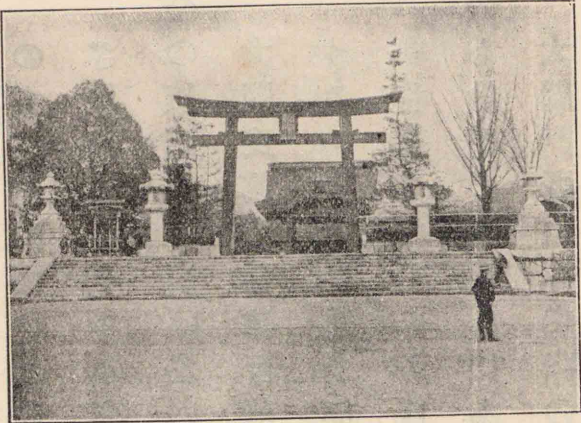
筆 吉 秀

に出現せし偉物として見るべきのみ。

なり。信長の常になしたる風體なり。その他、公の奢は多く信長を本とせり。聚樂、伏見の宏壯は、安土の結構をまねたるに始る。公の失は自家の才略を恃み、古今の治亂を究めずして、戒愼の足らざるにあり。公は百年の大亂を定め、人民塗炭の苦を救はんが爲に、この世

聚樂 京都内野の聚樂の第。
伏見 京都府伏見にありし桃山の第。
安土 天正四年、信長が近江國蒲生郡安土村に築ける安土城なり。

また公の明察にして苛ならざるは、左の一事にて知らる



社 神 國 豊

山城の内山里といふ處を、梅松といふ坊主に預けらる。新に松を植ゑて程もなきに、松茸生じたりとて献上す。太閤笑ひ給ひて、「わが威光誠にさもあらん」と宣ふ。それより數度獻ず。實は他處より求めて獻じたるなり。太閤左右の者に、「もはや松茸獻ずることやめさせよ。

生え過ぐるぞ」と宣ふ。

公が大體に敏くして、物事に細瑣ならざること、左の一事

柴田勝家

信長の臣。修理亮と稱す。天正十一年秀吉を除かんとして敗れ、越前北莊に自殺す。(二一九〇年—二二四三年)

佐佐陸奥守

名は成政。後秀吉に降り、肥後に封ぜられしが、天正十六年失政の罪により死を賜はる。(二一九五年—二二四八年)

氏郷

蒲生氏。信長の臣。後秀吉に従ふ。文祿四年歿す。(二

に見ゆ。

太閤の柴田勝家を征する時、城に火の手の上るを見て、そのまま越中に赴き、佐佐陸奥守を征し給ふ。勝家が首は見ざれども、さやうの事は何とも思はざるなり。

公の無造作なるは左の如し。

太閤氏郷を會津百萬石に封じ給ひつ。その後、氏郷の出仕するや、太閤他事を問はずして、「汝手を能く書けり。謠本を一番書きてくれよ。硯紙を持ちきたれ」と宣ふ。

公も儉徳の心なきにあらざること、左の如し。

太閤高野山へ參詣の時、割粥を進めよとのたまふ。暫ありて料理人調へ參らす。太閤喜びて、高野山は白無き處なり。

二一六年—二二五五年)

高野山

和歌山縣伊都郡にあり。頂上に眞言宗の大本山金剛峯寺あり。

北條氏直

氏政の子。後高野山に放たる。天正十八年歿す。(二二二一年—二二五〇年)

諏訪峠

長野縣諏訪郡。

公が寛仁なる左の如し。

北條氏直方より、諏訪峠より東、八萬石の領地は氏直が領ならでは協はぬ處なり。こを渡されなば上洛せんといふ。太閤與へんとのたまふ。諸臣同ぜず。太閤宣ふ、八萬石の地を吝み、諸卒を遠國の合戦に勞せんこと不便なり。これを

與へて後、上洛せずして異變あらば、その時軍を發せん」と。
公が無貪著なること、左の如し。

太閤伏見在城のとき、鐵砲四五十ばかり放つ音す。座にある人皆皆怪む。太閤「大名ども、鳥など打ちに出でて歸るさに、玉藥を打ち抜くならん」とてあざ笑つておはす。見に遣しければ果して然り。この者ども聞きて、少し氣味あしく思うて、一兩日過ぎて御前に出づ。太閤笑つて宣ふ。この頃の遊面白かりしか」とて、少しも心に掛け給はぬ體なり。
右の諸節は、老人雜話、武功雜記、備前老人物語の諸書より抄出せり。これらは、公の時を去ること遠からざる頃の人人の手になりしものなり。(矢野文雄—古人評論)

矢野文雄
政治家。龍溪
と號す。舊豊
後佐伯藩士。
嘉永三年生ま
る。慶應義塾
出身。嘗て特
命全權公使と
して清國に駐
割せり。

八 史傳を讀むべし

青年はいかなる書物を讀むべきかとの御問に對し、卑見左に申し述べ候。

人は何人も摸擬性と感染性とを有し居り候。而して一生の中、この二性の最も熾なるは、少年時代、若しくは青年時代に候。どちらかと申せば、摸擬性は少年の方が強く、感染性は青年の方が強く候。君子に接すれば君子に感染し、小人に接すれば小人に感染し、豪傑に接すれば豪傑に感染し、小才子に接すれば小才子に感染するものに候へば、讀物の選擇もこれより割り出さざるべか

らずと存じ候。

この頃の青年の一般の缺點は、歴史傳記の知識に乏しき事に候。随つて今の青年は、聖人、君子、英雄、豪傑、志士、仁人、大學者、大宗教家、忠臣、孝子などに接すること極めて少く、随つて自然、人物が小さくなり、眼界が狭くなりて、神經のみが尖り申し候。これ實に國家百年の大患に候。故に小生は大呼す。請ふ大いに史傳を讀まれよ」と。

又一つ、今の青年に通じたる缺點これあり候。それは箇人的、若しくは孤立的といふ點に候。即ち前代と絶縁して、おのれ一代と思ふ考があまりに強く候。随つて重厚雄大の氣風無くして、こせこせ、ちよこちよとする小人物

おのれ

積善の家には
云云
易に出でたる
語。
解一解

が多く候。これも史傳と親まぬよりおこることに候。史傳を讀めば、積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃ありといふことがよく解り申すべく、行がおのづから重厚になり申すべく、人物もどつしりとして參り申すべく候。

申すまでもこれ無く候へども、國家の盛衰興亡は、全く人物の有無如何にこれあり候。盛なる國も人物をければ忽ち衰へ、振はざる國も人物あれば忽ち振ひ申し候。我が國將來の發展に就いても、國民の人格を重厚雄大ならしむるが最大急務なりと確信致し候。人格を重厚雄大ならしむるには、史傳に親みて偉人に感染するに

消え。

若くは無しと存じ候。聖賢の遺著は史傳を歸納したるものに候へば、史傳と共に常に座右に置き、日夕絶えず讀誦なさるべく候。さらば卑怯鄙吝の念次第に消えて、心が公明正大になり申すべく候。文學も古きものは精神の香たかく、人の心を淨化致し候へども、近時の文學物は動もすれば人を誤るもの多ければ、その選擇には深き注意を要すべく候。(大町桂月—新學生訓)

九 境遇

境遇カ、ワレ境遇ヲ作ル。(ナポレオン)
奮闘セザレバ勝利ナシ。(シヨペンハウエル)

生命ノ存スル間ハ、ソコニ望アリ。

(キケロ)

河深ケレバ流靜ナリ。(シエクスピア)

吠ユル犬ハ、眠レル獅子ヨリモ遙

ニ有用ナルコトアリ。(アーヴィング)

勝ハ己ニ克ツヨリ大ナルハナシ。(テラト)



ヤビスク、シ

數多ノ事件ヲナスベキ捷徑

ハ、一時ニ唯一事件ヲノミナ

スニアリ。(リチャードセシル)

德ハ猶貴重ナル香料ノゴト



ンリクンラフ

シ。碎カルル時、最モ多ク芳香ヲ放ツ。(ペーコン)

怠惰ハ猶鏽ノゴトシ。使用セザル鍵ハ鏽ニヨリテ腐蝕シ、
日常使用スル鍵ハ光輝ヲ放ツ。(フランクリン)

一〇 大海の日出

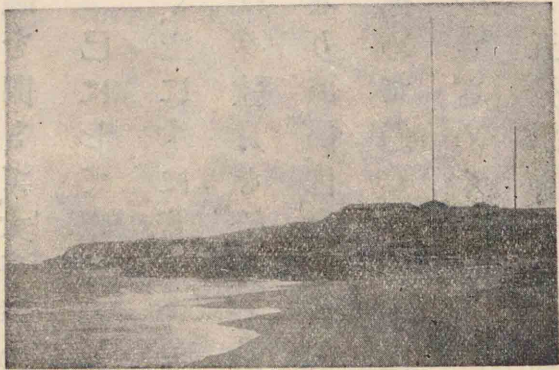
銚子
千葉縣海上郡
にして、利根
川の河口に臨
む。

Prussian-blue
ブルシヤン、
ブリュー

枕をうごかす濤聲に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。時は
明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の水明樓にし
て、樓下は直に太平洋なり。

午前四時過にもやあらん、海上尙ほの闇く、波の音のみ高
し。東の空を望めば、水平線に沿うたる方は燦りたる樺色を
なせるが、上の方は次第に濃きブルシヤンブリュー色とな
り、ここに一痕の弦月ありて黄金の弓を挂く。その光さやか

犬吠岬
銚子の東南約
一里。



銚子海岸

にして、さながら東海を鎮するに似たり。左手に黒くさし出
でたるは犬吠岬なり。岬端の燈臺に
は廻轉燈ありて、陸より海にかけ連
に白光の環をゑがく。
暫する程に、長風冷冷として海原
をはらひ來り、夜の衣は東より次第
に剥げて、蒼白き曉の波を踏みて此
方へ此方へと近寄る狀も指點すべ
く、磯の黒きに濤白く打ちかかるさ
まも漸く明になり來りぬ。目をあぐれば、黄金の弓と見えし
月も何時しか白銀の弓とかはり、燦りて見えし雲も次第に

澄みたる黄色を帯びぬ。森茫たる海原に立つ波の、腹は黒く、背は蒼白く、夜の夢はなほ海の上にさまよへど、東の空已に
瞼を開きて、太平洋の夜は今明けなんとす。

已にして曙光は花の發くが如く、波紋の圈をゑがくが如く、空に水に擴りゆきて、水いよいよ白く、東の空ますます黄ばみ、弦月も燈光もわれと薄れゆきて、果はありとも見えずなりぬ。偶、日の使とも覺しき渡鳥の、一列、鳴きつれて海原を掠めて過ぐれば、大海の波といふ波は、盡く東の方を顧みつつさざめく。

五分過ぎ、十分過ぎぬ。東の空見る見る金光さし來り、忽然として猩紅の一點海端に浮み出でぬ。すはや日出でぬと思

ふ間もなく、息をもつかせず、瞬く間もなく、海神が手もて撃ぐるままに、水を出づる紅點は金線となり、黄金の櫛となり、金蹄となり、一搖して名残なく水を離れつ。その時萬斛の黄金たらたらと昇る日より滴りて、萬里一瞬、此方を指して長蛇の如く大洋を走ると思へば、眼下の磯に忽焉として二丈ばかり黄金の雪を飛しぬ。(徳富蘆花―自然と人生)

一一 大海原 (坪内逍遙)

大いなるかな大海原。

朝に夕にどうどうと、

動き轟き夜もすがら

坪内逍遙
文學者。文學博士。早稻田大學名譽教授。名は雄藏。名古屋市の人。安政六年六月生まる。著作頗る多し。

大浪小浪寄せかへる。
 いづこに打たぬ浪を見ん。
 いつ浪の音を聞かざらん。
 大いなるかな大海原。

くづす(崩)

世界の山山ことごとく
 崩すとも海は埋るまじ。
 世界の川川絶間なく
 注げども海はとこしへに、
 不増不減の瑠璃の色。
 長閑きさまは海にあり。
 風の風ぎたる春の沖に、

蓬萊山
 東海の中にあ
 りて神仙の住
 むといふ山。

朧にうつる月見れば、
 荒ぶる心もなぎぬべし。
 まつ島かげの朝ぼらけ、
 蓬萊山もよそならず。
 凄じさはた海にあり。
 春秋二季の大あれに、
 はやて起つて浪立てば、
 甲鐵艦も木の葉と漂ひ、
 おほ高潮の逆巻けば、
 村村流れて迹もなし。
 山はくづれ川は涸れ、

國興亡し人かはり、
 陸には古今の別あれど、
 うな原のみは開闢の、
 神代のすがたそのままに、
 動き轟き寄せかへる。

一二 近江聖人

中江藤樹先生は、俗稱を與右衛門といひ、江州大溝在なる小川村の百姓の家に生まれ、學、王陽明の流を汲みて、その德行一世に秀で、遠近皆その風を望まざるはなかりきといふ。先生の歿後、尾州の一士人、江州を過ぎける途次、ふと先生

中江藤樹
 儒者。名は原。
 世に近江聖人
 と稱す。(二二
 六八年—二三
 〇八年)
 小川村
 滋賀縣高島
 郡。今青柳村
 に屬す。

王陽明
 明の大儒。名
 は守仁。良知
 の説を立て
 て一世の師表
 たり。(西曆一
 四七二年—
 五二九年)

の墓所小川村に在りと聞き、その村に尋ね行きて、路傍の農夫に向ひ、「先生の墓所は」と問へるに、農夫は、「畑道なれば知れ申すまじ。案内致し參らせん」とて、士人を導きてゆきけり。程なく小き藁屋の前に出でけるが、「しばし待ち給へ」とて農夫は内に入り、やがて出で来るを見れば、木綿の新しき著物のうへに、紋附きたる羽織を著たり。士人は驚きて、さても丁寧なる男かなと思ひて、附きてゆくほどに、やがて墓所に到りぬ。農夫は竹垣の戸を開き、「いざ入りて拜し給へ」といひてその身は戶外に退きて恭しく拜伏せり。士人はこの様を見て再び驚き、さては衣服を更めたるは我に對する爲にはあらで、先生を敬する爲にてありけるよと思ひつきければ、農夫

すぢ(筋)

に向ひて、「汝は藤樹先生の家來筋の者なるか」と問ひぬ。農夫は詞を改めて、「さには候はず。されどこの村の者は、一人として先生の御恩を蒙らざるものなし。我等が親を敬ひ子を慈むことを辨へ知りたるは、皆これ先生の御恩なれば、子子孫孫必ずその御恩を忘るべからず」と、わが父母常に教へ候ひき」と答へたり。士人はそのはじめ、只何となく一見せんとの心にて來れるが、この農夫の舉動によりて、俄に敬慕の念を起し、懇にその墓前に禮拜して歸りきとぞ。



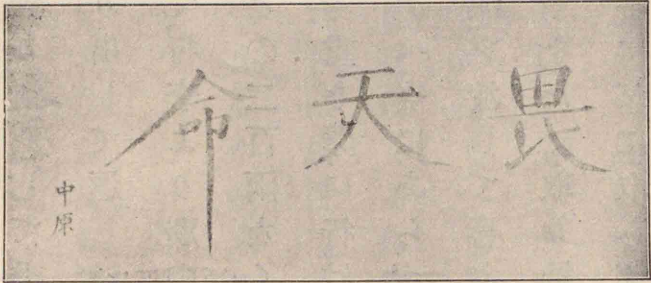
中江藤樹

熊澤蕃山

名は了介。備前侯池田光政に仕へ、庶政を整ふ。元祿四年歿す。(二二七九年—二三五一年)

河原市

滋賀縣高島郡榎木の宿
滋賀縣滋賀郡



中江藤樹筆

この一事、以て先生の徳行のいかに高くして、またその化育のいかによく下に及びしかを見るに足らん。

熊澤蕃山は先生の門人なり。この人の先生に従ひし始を尋ぬるに、面しろき話あり。

その頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊りぬ。馬方河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解きつれば、財布一つ出でたり。取りあげて見れば、金二百兩あり。大

たづぬ(尋)

よみがへる

(蘇)

いに驚き、いそぎ榎木に走りゆきて、かの飛脚の宿れる家に
 到り、對面して委しく尋ね問ふに、相違無ければ、その金を取
 り出して返しけり。飛脚は死したる者の蘇りたるここちし
 て、行李より別の金子十五兩を取り出して馬方に與へ、もし
 この二百兩なくば、わが一命を失ふのみならず、親兄弟まで
 も重き罪に行はれん。さればこの恩なかなか言葉のいひ盡
 すべきにあらず。まづ當座の御禮までにこれを贈り奉ると、
 涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚ける顔色にて、そなたの金を
 そなたに取り納め給ふに、何の禮いふことかあるべきとて、
 手にだに取らず。

色色にこしらへいへども、更に受けずして歸らんとする

留一箇

うち(氏)

故止むことを得ず十兩となし、五兩となし、三兩となし、段段
 減じて遂には金二歩となし、せめてこればかりは」と、理を盡
 し詞を盡していふに、「この金を受くる程ならば、二百兩をも
 留め置くべし。それだにかく返し申すからには、聊にても謝
 禮を受くるはわが心にあらねど、餘に餘儀なくのたまへば、
 さらば鳥目二百文を賜へ。これは今夜休むべき所を、ここま
 で追ひかけ來れる賃錢なり、わが取るべき錢なれば申し請
 くべし」といひて、二百文を懷にして歸らんとす。

飛脚は感に堪へかねて、その氏素性を尋ね問ふに、「名ある
 者にあらず。又何一つ知れる者にあらず。只わが在所の近く
 に小川村といふ所あり。そこに與右衛門といふ人おはして、

釋一釈

夜毎に講釋といふことをす。某も折節往きて聞き申したるに、親には孝を盡すべし、主人は大切にすべきものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も、わが物にあらざれば取るべき理なしと心得たるまでの事なり」といひすてて歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さてもこの度は辛き命活きのびて、各方にも對面することを得たりとて、ありし次第を委しく語りけり。

蕃山をりふし田舎よりのほり居て、學問修業の最中なりけるが、この物語を聞きて、その人こそ誠の儒といふものな

備前侯

岡山の城主池田光政。學を好み、心を政治に用ゐ、賢君の名あり。

天和二年卒す。(二二六九年—二三四二年)

橘南谿

宮川氏、名は春暉。伊勢の人。醫を業とし、京都に住む。東西を漫遊し、足跡海内に周し。文化二年歿す。(二四六五年)

れとて、翌日すぐに江州にゆきて、小川村に藤樹先生を尋ねて隨從を願ひたるに、「人に教へ申すほどの學徳なし」とて、更に許し給はず。蕃山ひたすらに願ひて、二日が間先生の門にたたずみて歸らず。先生の老母これを氣の毒がり、よしや、まづ内に入れ申せよ」とあるに、辭みがたくて内に入れ、遂に師弟の契約をせられけりとぞ。

その後、先生を備前侯の招き給へる時、その身は病身なりとて固く辭し、門人熊澤といふものあり。御役にも立つべきものなり」とて蕃山を出されけり。いづれも格別のことなり。

(橘南谿—東遊記による)

一三 同情

ダニエル、ウェ
ブスター
Daniel Webster
(西曆一七
八二年—
八五二年)
わきまへ(辨)

米國の政事家、法律家として名高きダニエル、ウェブスターが、尙幼かりし頃の事なり。兄某が一疋の鼯鼠を捕へて殺さんとしけるを見て、憫に思ひ、善惡の辨なき獸を殺さんはずむごし。命を助けて放ち給へといふ。兄いはく、然らず、こやつは屢わが家の畑を荒し、作物を害せり。今殺さずば、復更に同様の罪惡を重ねべし」と。ダニエル重ねていはく、「兄上よ、世に生きとし生けるもの、物食はでは生活すること能はず。兄上がいはるる罪惡も、彼に取りては食を得ん爲の止むを得ざる働のみ。よしや眞に惡事なりとも、死に當るほどの罪にはあらじ」と。

鼠一鼠

くつがへす
(覆)



坪内逍遙

兄弟の押問答は父の耳に入りぬ。父は兄弟に向ひ、雙方とも言ふことに一理あり。われ裁判官とならん。兄は原告なり、ダニエルは辯護士なり。鼯鼠を被告としてここに公判を開くべし。原告たる兄の申立はいかに、まづそれを聽かんといふ。兄は乃ち、「父上よ、否、判事閣下よ。被告は土中に棲息するを天分とす。然るにかれ、時には土上に出で來り、その際田畑の土を浮かせ、蒔きたる種を覆し、作物の根を緩め、甚しきに至りてはこれを食ふ。農事を害すること甚し。この間も、わが父の畑を穿ちて蜂の巢の如くにし、剩へ馬鈴薯の大いなるを擇びて食

へり。こやつの如きを助けおかば、今後の害は一倍たるべし。且、經驗によりて狡猾の度を加ふべければ、再び捕ふること困難ならん。すべからく今殺して後患なからしむべきなり。又一つには、せめてもの償に、その皮を剥ぎて何かの料とせん。

と辯舌淀まず滔滔と述べければ、父の判事も感心したる體なり。その時、ダニエルは徐に口を開き、

「寛仁なる判事閣下よ、願はくはまづ被告が現境に陥りたる原因を察せらるべし。彼等とても有情の動物なり。天地間にうまれ出でたるうへは、生を保つ權利を有すべき道理なり。かつ彼等は、虎狼などの如き暴戾の動物にあらず、

おほかみ(狼)

生存せしめんに何ほどの害かあらん。原告は「害、害」と呼べども、被告が生を保つ必要上より食ひしは僅に物の根のみ。菜根、草根のみ。人間に取りて幾許の害ぞ。彼は悪と知りて爲ししにあらず、性に隨ひて然せしのみ。悪と知りて悪を爲ししものこそ悪むべけれ、性に隨ふものを罰すべけんや。人は萬物の長ならずや。かばかりの自由を下等動物に吝みて、その生をすら奪はんとするか。賢明なる判事閣下よ、被告の情狀を察せられて慈悲の判決を賜へ。」

と至誠面に溢れ、慨然として述べけり。辯護の半より、判事の目は潤ひぬ。ダニエル述べ了りて父の面を見上ぐれば、父は涙を落しつつ聲さへも震ひていへり。兄よ、鼯鼠を放て、放て

と。(坪内逍遙)

刺
諷する

一四 諭言五則

鹿の兒あり、母に隨ひて出でて遊ぶ。騎して弓を手にし、矢を負へる者に遭ふ。母のいはく、「汝かの肩にある物を知るか。飛び來て身に中る時は必ず死せん。汝急にこれを避けよ」と。鹿の兒、首を振りていはく、「兒はその飛び來る狀の如何なるかを試みんとて、母の去るにも去らず、遂に矢に中りて死せり。世には、頑にして教に従ふことを知らざる、往往かくの如きものあり。」

一小猴、人の髭を剃るを見て、刀を偷み、これに擬してみづ

からその鼻を傷く。世の習はずして事に従ふもの、多くはこのたぐひなり。

一貧兒あり、菌を採りて歸り、その母に誇りていはく、「阿母の採るところは常に醜し。兒はその蓋の眞珠の如くにして、その襪の臙脂の如くなるものを獲たり」と。母これを見て歎じていはく、「これ毒ありて食ふに堪へざるものなり。兒これを誡めよ。外美なるものは、その中多く毒を含むものなり」と。この菌のみにはあらずと。

栗鼠樹を攀ぢて胡桃を摘み、その皮を噛み破り、齧感していはく、「何ぞ、この苦きや」と。既にして核に及ぶ。乃ち笑ひていはく、「まづ苦きを喫せずば、安んぞこの滋味を得ることあら

安んぞ
(安)

那珂通高
通稱稻穂。陸
中の人。嘗て
文部省に入
り、榊原芳野
等と古事類苑
を編す。明治
十二年歿す。
（二四八八年
—二五三九
年）

見渡すばかり
田んぼとくはかり

んと。

一農夫あり。兒を携へ、出でて稻の熟せりや否やを検す。兒問ひていはく、「この稻の穂を見るに、或は昂く或は俯す。いづれか貴き」と。父二つながらその穂を抽きてこれに諭していはく、「内充實すれば必ず下る。かの昂然として屈することを知らざる者の如きは、皆その未熟なるによりてなり」と。

先半了
通

（那珂通高）
まか（技術）
上降してあそび

一五 深秋の感興

五君、大分秋が深くなつて來ました。煙のやうな霧の下に、黄ばんだ稻の田が目路のかぎり廣がつて居るのを見たり、

直喻法 性急喻法

前方を向後方低
つるるう

たよりなき
ふりしげ
さびしげ

けい 様子ありさま
もあらはす
挿尾語

日一日と紅葉してゆく片岡の木立を眺めて居たりすると、秋の一日といふものが本當に尊く思はれます。どんなにいろいろな苦痛を忍んで來たにせよ、生きて居た事を、また生きて居る事を、心から感謝したい氣になります。

玉蜀黍はすつかり野から影を無くしてしまつて、黍だけがまだ疎な葉を戦がせてゐます。實つた黍の穂はもう半月も前に刈り取られたのですが、まだ實りきれない穂だけが取り残されてゐます。そのひよろひよろした寒さうな頼りなげな穂の影が、一層秋のわびしさを強く意識させます。ついでこなひだまでには、燃えるやうに畑の一劃に咲いてゐた紅蜀葵が、纔に苧殻のやうな殘骸を残してゐます。萩も三

日前の嵐で、すつかり地に叩き付けられてしまひました。あれほど澤山ゐた蜥蜴も、一疋も居なくなりました。冬籠の穴を探してゐた蛇の子も、めつたに姿を見せなくなりました。何も彼も冬籠の準備を急いでゐるやうです。静過ぎるほど眞晝の野は静です。木も草もすべての小さな動物も、みんな冬の日の眠に急いで居るやうです。人間の姿だけが野の面に終日動いて居ます。さくさくと鎌の音だけが寂しげに傳はつて來ます。君は、あの收穫を急いでゐる人達の寂しい鎌の音を、落ち著いた心で聽いた事がありますか。黙黙として鎌を手にし



(第一二七)

牧羊者

て野に働いてゐる人達の姿を見ると、部屋のなかにぢつとして居るのが、濟まないやうな氣がしてなりませぬ。

私は本を讀むか原稿を書くかして疲れた時、疊の上に仰向になつて寢轉ぶことがあります。そのやうな時、野に働いてゐる農夫たちの鎌の音が聞えてくると、私は疊の上に寢そべつて居たりする事を、罪惡だと思はずに居られなくなります。

私はまた一つの作品を纏める爲に、家の周圍や、附近の野らを歩くことがあります。さうすると、この頃では、小川や水溜で、老人や女達が水のなかに這入つて、大根だの葱だのをせつせと洗つて、車に積んでゐるのを見受けます。日が暮れ

てしまつても、カンテラを點して働いてゐるのです。そして夜が更けてから、東京まで荷車で運んで行くのです。私は終日終夜働いてゐるあの人達の生活を見ると、自分が懐手の一人であることを、恥しく思はずには居られなくなる事があります。

私は、教壇に立つて居れば、或はペンを握つて居れば、それで人類に對するお役目は濟むんだなどといつて居るのは、餘に勝手過ぎた事のやうに思はれてなりません。

ペンを握つて机に凭り懸つてゐても、窓の外野らの人達を見れば、まだまだ私等の方が安逸を貪つた生活を送つてゐるといふことが、ぼんやりとではあるが胸に迫つて來

濟一濟

倒置文倒裝文

主部と述部を
上下にくりかへし
書きかへる

ひつたり、
急に全くと
具合よくおぼは
る

こほろぎ

ます。

私も出来ることなら田舎に引つ込んで、自分で食ふだけの物は拵へて見たいと思つてゐます。無論まだ幾年後の事だが見當は付きませんが。

世界の人達が、自分の食ふだけの物は自分で作るやうになつたら、どんなに人類は恵まれるか知れないと思ひます。この頃まで盛に鳴いてゐた蟲が、びつたり鳴かなくなりました。もう彼等は冬の眠に這入つてしまつたのでせう。恐らく次の時代の子孫だけを大地の懷に預けて、自分等は永遠の眠に落ちて往つたのでせう。こほろぎだけが、まだ夜になると臺所の隅で鳴いてゐます。それが又ばかに冬の近づ

働かざる人は
食ふべからず
御とは祈り
尖閑居して
不善とせり

ミラ、ホー
一分働きの報酬も
受せしむるは

甘え

いた感じを濃厚にさせます。
夜が更けてから、髪を梳いてゐる妻の櫛の音と、こほろぎの鳴く音とが一緒に、室の静寂を幽に破つてゐるのを、ぢつと聽いて居たりする事もあります。

晝はいろいろな小鳥が木に来て鳴くやうになりました。大抵渡鳥なんでせう。

胸毛の紅い小鳥や、嘴の紅いのや、名も知らぬ可憐な小鳥が、代る代る木に来ては囀つてゐます。その聲がいかにも、久しい間別れてゐた秋の野に歸つて來た、靜な嬉しさを囁いてゐるやうにも聞えるのです。また靜な大空を母として、母の懷に甘えて鳴いてゐるやうにも想はれるのです。聽いて

ある私自身までが微笑みたいやうな氣になります。

(吉田絃二郎—雜草の中)

一六 大森閑語

一、

折ふし友の訪ひ來るあれども、大森の僑居地僻にしてこれに饗すべきものなし。乃ち時に滿庭の落葉を集めて藪を焼く。白煙黒煙高く渦まき上り、猛火風に煽られて、颼颼の聲を發するところ、枯枝を取つて熱灰を探れば、累累として藪既に柔なり。未だ味はざるに、これを圍むもの皆破顔一笑す。落葉かいて君と小藪を焼かんかな。(俳句) 一七

大森
東京府荏原郡
にあり。東京
の郊外。

田舎の
重なる
葉危
田舎の
川堂の
危

杉村楚人冠
名は廣太郎。
和歌山縣の
人。東京朝日
新聞記者。

續一統
城が山
山梨縣南都留
郡。

湖水
河口湖のこと
なるべし。

ゆくさま、學ぶに足らずとせんや。(杉村楚人冠へちまのかは)

一七 少年行

消える頃には降り、消える頃には降りした雪も霽れ、幾日か天氣が續いて、道路も固つた。或日の午後、例のとほり城が山の手前の大窪山といふのへ這入つた。南向ながら松林の薄暗い程茂つて居る山で、谷も深い。然し、自分の家からは一番近く、登りながら木立の間から富士も湖水も一目に見えるのみならず、この山は昔我が家の持物で、今雲を呼ぶ老松も、皆幾代か前の先祖が仕立てたものだ。と聞いてから、何とはない痛みと懐しみに、無論子供心に零落とか追慕とか

いふ纏つた思想はないが、つい足が向き馴れた。

自分はこの山へ來ては、いつも曾祖父の事を考へる。母の話に依ると、曾祖父はその頃では近郷切つての學者であつた。母一人子一人の間を、まだ造酒介といつた二十歳の年にお江戸へ逃げて、學堂とやら聖堂とやらで修業して來たのだといふ。そして、お前も精出して學問して、えらい者になれよと附け足すのが常である。

ほきほきと枯枝を折つては集め、折つては集めて居ると、木から木へ、チキチン、チキチンと鳴き連れ渡つて來る四十雀の群。それもやがて谷を越してひつそりとなる。

今日からいよいよ冬の休暇が始つた。一週間ばかりはこ

修多辞法
(擬聲法)
態
反西覆法
折つてはあ
ぬりない

知^チ己^キ親友
知^チ昔^キ知^チ人

の山へも來られるかと考へる。ふと昨日始めて一緒に遊戯した時、牧夫君が打ち解けた言葉を懸けてくれた事を思ひ出すと、嬉しくて嬉しくて堪らぬ。それにしても、休になつては暫く逢はれぬ。逢はぬ間にまた素氣なくなつてしまふか知らんと氣遣ふ。

大東が二把出來たので、荷を作つて、さて切株で一休する。何の氣なしに向を見ると、木立の暗い間に人顔が見えた。と思ふうちにどこへか消えた。

「ヤアイ……………」

と呼んでみると、向の方でも「ヤアイ」と應へる。しかも同じ調子だ。をかしいぞ、この間も父に連れられて始めて市場の賑

畫一画
二宮金次郎
經濟家。名は
尊徳。相模の
人。安政三年
歿す。(二四四
七年—二五一
六年)

を見た時、同じやうな顔を認めた。はつきりとは判らなんだが、牧夫君のやうだつたので、後を追つた事があつた。立ち上つてよくよく見たが、誰も居ない。急に襟元がぞつとした。荷を背負つたまま一散に阪を飛び下り、林を出抜ければ、夕暮ながらぱつと天地の開けた心地、腹が空いて荷が重くなる。外何事も無い。早く歸つて來うよ」とお祖母様が云つた。今日は蜀黍のお團子を拵へておいてくれる約束であつたと思ひながら、疲れた足に一寸立ちどまると、膝が慄へる。股引が切れて居る。修身書に畫いてあつた二宮金次郎、あれはこんな風で本を讀みながら歩いて居たと、また歩き出す。おれも明日から本を持つて來ようと考へると、もう金次郎に

なつたやうな氣がする。えらくなれ、えらくなれ」といふ聲が聞える。えらくなるともさ」と歩く足にも力が這入る。我知らず微笑が顔へ上る。

「坊やーいー」

皺がれ聲で不意に呼ばれて、つと彼方を見遣ると、お祖母様だ、お祖母様だ。婆婆かぶりの手拭の下から、皺だらけの顔で嬉しさに笑つてゐるやうだ。そして背中には、例のとほり子供をおぶつてゐる。自分も急げば向も急ぐ。畑の畔で一緒になる。案の定お祖母様は笑つて居た。

葉の落ち盡した桑株の、低い林のやうに立ち竝んでゐる下には、雪が斑に消え残つて、その間には凍て附いたやうに

しわ(皺)

道

二葉の麥がごちやごちや黄色い顔をして、寒さうに臥し重なつて居る。湖水の方から劔のやうな風が吹いてくる。

「おお寒、おお寒。早く歸らんぢよよ」と云ひながらも、お祖母様の足はとほとほしてゐる。お祖母様はもう七十近い。

「ほらほら、杉の木の間へ燈が點いた。ありや家のだぞよ。」

(中村星湖少年行)

中村星湖
文學者。名は
將爲。山梨縣
の人。早稻田
大學出身。

一八 兎狩

收穫が済む、霜が降る、裏山の楓が染る。すると兎狩の季節がそろそろ始る。つくるひに遣つてあつた網も出來て來る。「何日は兎狩」といふ貼札が出る。脚絆、草鞋の用意に忙しくて、

僕等は何も手に著かぬ。

せいぞろへ。
(勢揃)

愈その日になつた。炊事番は夜半に起きて握飯を拵へる。皆支度して塾の庭に勢揃する頃は、午前三時過であらう。月が白く冴えて居る。三たび関の聲を揚げて、月影を踏んで出かける。大人組は綱をかついで、高らかに詩などを吟じて行く。僕等は黙つて、しかし威勢よくついで行く。

ねむさうな鶏の聲のする村も過ぎ、けたたましく犬の吠えかかる村も過ぎ、野路を通り、谷川を越え、もう一里半も來たらう。月落ちて野は一面の曉闇、前に行く者の姿もはつきりとは見えぬ。ふと、すばらしく大きな眞黒なものが鼻の先にあらはれる。山だ、目的の山だ。まだ早い。皆焚火をしながら

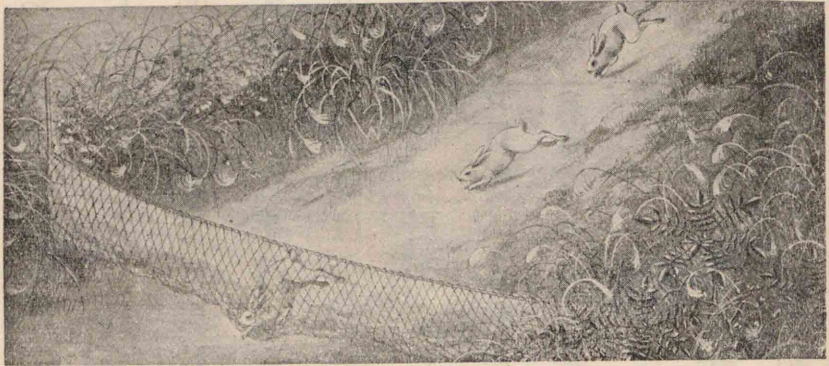
天明を待つて居る。

僕は藁の上に寝ころんで居ると、背は寒いが、顔や腹は焚火に暖る。炎炎と立ち昇る焰の間に、ちらちら見えて居た一同の赤い顔が、次第に遠くなつて、つい、うつとりと一寢入したと思へば、忽ち起される。眼を摩つて起き上ると、なる程天明だ。東が白んで、曉の風が切るやうに面を吹く。焚火の迹だけ黒い圓を描いて、四邊は一面の霜だ。やがて勢揃して山にかかる。進軍の號令がかかる。関の聲が一時に揚る。二山も追ふ頃は、もう朝日がきらきらと秋の空に昇つて居る。

今思うても愉快だ。秋が黄に、紅に、紫に、鳶に、あらゆる色彩のかぎりを盡した木を押し分け、葉を打ち拂ひ、聲をあげて

登る心地、網近くまで追ひつめて、どうかと思つて居る時、どこからか「とれた」といふ聲がして、われ知らず棒を振つて勝鬨をあげる心地、網番をして、攻め寄せる勢子の叫の間近になるに、兎のうの字もかけて來ず、「あだめ」と落膽する時、突然がさがたと音をさせて、覗く鼻先へ飛び込んで、二つ三つ網ながらに蜻蛉反る兎を、樹蔭から飛びかかつて押へる心地、落葉かき分けて、谷川の水を口づけに飲んで、木の根、草の上に脚投げ出して握飯にかぶりつく心地、食つてしまつて落葉の床に仰向に寝て、碧玉よりも澄んだ空を眺めて、汗ばんだ顔を冷冷した風に吹かせる心地、數へ立てると際限も無い。

つたかづら
(蔦葛)



兎 狩

秋の日の短さ、まだ三疋しか取れぬに、もう鴉が鳴き出した。遙に見える湖や川は、金のやうに夕日に閃いて居る。獲物は蔦葛で、四脚を縛つて、大人組が擔いでとくに還つた。僕等は紅葉の枝を折つて、ぶらぶら後から還つて行く。山を降りて野に出ると、日はかなたの森に沈んで、夕煙が村村に立ち昇ると思ふと、薄紫にけむる野末に、大きな月が顔を出す。その月が、やや高く、やや小さくなつて、う

ちつれて歩み行く影の大分短くなる頃には、僕等はまだ塾に歸り著いた草鞋を脱いで、顔を洗つて、先生はじめ一同大胡坐で、てんでに鬼汁を盛つて飯を食ふ。この鬼汁は、別名を大根、胡蘿蔔、牛蒡、豆腐、蒟蒻汁といふのではあるまいかと思ふほど、正味は少い。しかしその味、否それよりも、食つてしまつて著物も更へず、ぐつすり寝る時の心地は何ともいへない。夢も見ない。身動もしない。翌朝の九時頃までは死骸も同然だ。(徳富蘆花)

一九 生存競争

地球上には、動植物各種をして自由に増加せしむべき餘

犠
牲

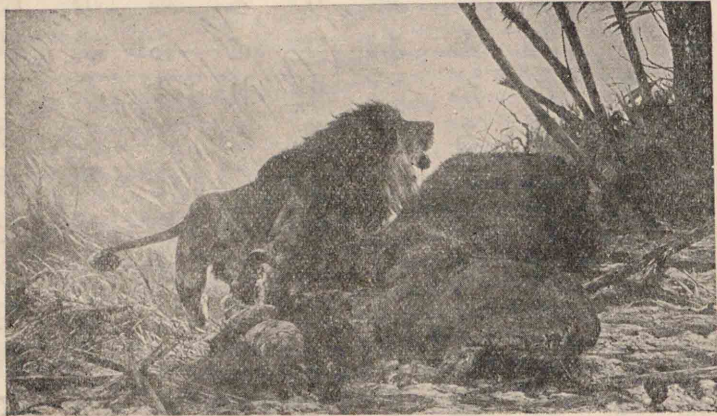
地は少しもない。そこに動植物の各種が、遠慮なしに多数の子を産むのであるから、互の間に劇しい競争の起るのは、見易い道理ではあるが、その有様を詳しく論ずるには、まづ諸生物の生活する有様から考へてかからねばならぬ。

植物なしには草食動物は生きて居られず、他の動物なしには肉食動物は生きて居られぬ。草食動物を飼ふ人は、初から毎日若干の草を犠牲に供するつもりでなければならず、又肉食動物を飼ふ人は、初から日日若干の動物を殺す覺悟でなければならぬ。これらのものが相竝んで、互に犯さず、共に生存して行くといふことは、到底出来ぬことである。

又、長閑な春の日に野外に散歩して見ると、草木の青青と

茂り、花の美しく咲いてをる處に、蝶が面白さうに飛び廻り、小鳥が楽しさうに歌つてをる。詩人はこれを詩に作り、畫家はこれを繪にかいて、共にこの世の楽しさを賞め讃へるが、それは極めて皮相な感じで、少し丁寧ていねいに考へて見る時は、世の中は決してかう無事平穩むじへいあんなものではない。鳥がかう歌つてをられるのは、今日までに數千萬の蟲を食ひ殺した結果で、歌ひながらもなほ蟲の命を取らうと探してをる。又蝶がかう舞つてをられるのも、幼蟲の頃に澤山の菜類を食ひ枯した結果である。而して彼處の樹の枝には、蝶を捕へて食はうと蜘蛛が巧たくまに網を張つて待つてをるし、此處の樹の頂上には、小鳥を捕へて食はうと鷹たかが鋭い目を見張つて狙つて

をるから、蝶の命も、小鳥の命も、殆ど風前の燈の如く、一つ油



ライオンと水牛との闘争

支那の或王様が云、この事、説苑正諫篇に出づ。

断すれば忽ち食ひ殺されてしまふ故、なかなか氣樂きらくに遊んでばかりはをられぬ。昔支那の或王様が、鄰國を取らうとして兵を起した時、一人賢明な臣下がお諫して、御苑の内に榆うの木があります。一つの蟬がその梢たに高くとまつて、いい聲で歌つては露を飲み飲のみみして、一向螳螂たかがうしろで覗のぞつて居るのを知りません。螳螂も亦蟬

にばかり氣を取られて、うしろで黄雀が覗つて居るのを知りません。私は又彈でその黄雀を打たうとして、露が著物をぬらすのを知りませんでしたと申し上げたといふ話がある。これは全く譬喩には違ないが、實際、動植物は總べてかやうに相殺し相食ひ合つて、自然界の平均を保つてをるのである。

かかる所へ、年年歳歳、動植物の各種が夥しく子を産むのであるから、その多數は、無論他の動物の爲に餌として食ひ殺され、生き残るものも、餌を得る爲に甚しく相争はなければならぬ。動植物の増加力は實際無限であるが、それは代代産まれる子が悉く生存し、繁殖するものと假定した上のこ

總一総

とで、現在の如く、いつも産まれる側から、他の動物にその大部分を食はれてしまふ場合には、もとより著しい増加の出来る筈がない。なほその上に、一地方における各種の動物の食物の總量には、常に制限があつて、生き残つたものが皆食ふことは到底出来ぬ。假に兎が一疋居るのを、犬が二疋で見附けたとしたならば、先に兎を捕へた犬は飽食し、後れた方は餓死せねばならぬ。譯ゆゑ、如何なる動物も、食ふ爲の競争は免れぬ。又兎の二疋居る所へ、犬が一疋來れば、速く逃げた兎は生き残り、遅い方は食はれてしまふ譯ゆゑ、大抵の動物は、食はれぬ爲の競争も避けることが出来ぬ。動植物ともに、各自皆、食ふやうに、食はれぬやうに、殺すやうに、殺されぬや

譯一訳

丘淺治郎
理學博士。東
京高等師範學
校教授。靜岡
縣の人。

ジーボルト
Siebold

うにと競争してをるのが實際の状態で、これを生存競争といふのである。(丘淺治郎—進化論講話)

二〇 忠君愛國

余がドイツ留學中、或年の天長節の祝宴に、日本の近世史に關係あり、日本の勳章を佩びて居る男爵ジーボルト氏の演説を聽いて、その中の一節に感じた事がある。同氏の言は、「西洋各國の革命は、國王に對する不滿から起つて、その結果は、いつも王室が權威を縮小し、或は全く顛覆するものであるが、日本のはこれに反して、政變毎に皇室の稜威を増し、繁榮を増進する」といふ意味であつた。これは如何にもよくわ

が國體の萬國に異なつたことを言明したものといはねばならぬ。

かの大化改新といひ、明治維新といふ政治上の二大變動は、わが國なればこそ極めて容易に成就して、雨降つて地かたまるといふ結果が得られたのである。新しい文化に接して、これを採用する必要の生じた時、制度改正の詔敕が一度煥發すれば、祖先以來の領土領民もさし出し、既得、將來の權も悉く打ち棄てて、唯唯諾諾として大命を承るといふことは、決して外國人にはあり得べからざる事實である。これであればこそ、わが國民は萬世一系といふ國體を維持し、時代の進歩に伴つて進歩したのである。かういふ場合には、外國

大化改新
孝徳天皇の大
化二年に行は
る。氏族分權
の制を改めて
朝廷集權とな
すにありき。
明治維新
明治天皇の明
治元年、政權
を皇室に復し
給へり。

百姓 万民

多象の人民

種 種類

王侯將相

も皆種類のあり

誰人より才能あり

天の命云云 易の革の卦の

では必ず國王と人民との衝突を免れぬ。一旦人民と衝突すれば、國王が散散な目に遭はせられた例は枚擧に遑が無い。國外へ出奔する位はおろかなこと、遂には刑場に引き出され、斷頭臺上の露と消えるといふ、英國、佛國の歴史などは、日本人の目からは殆ど信ぜられぬ沙汰であつて、小學から中學にはひつて、始めて外國の歴史を學ぶものは、何人も必ず外國史に慘酷無道の事が多いのに驚くに相違ない。

元來革命といふ語は、天之命革而四時成といふ語から出たので、支那人は昔から、天子は天の命を受けて百姓を治めるものだといふ思想を根本として居る。それ故、聖人賢者たる以上は、誰が代つて天子になつても構はぬのである。これが爲に、歴代二十五朝、長い朝廷でも三百年とは續かぬ。その時には天の命が革つたものと覺悟して、平氣で新しい天子を戴いてゐる。かういふ國國には、決して大化の改新や、明治の維新のやうな改革が行はれる筈はない。イギリスの貴族は、今でも大きな領地をもつて居る。ドイツのもさうである。日本國民の皇室に對する考は、古今東西全く類例が無いのである。

二十五朝
夏、殷、周、東
周、秦、漢、東
漢、蜀、漢、晉、
東晉、宋、齊、
梁、陳、隋、唐、
後梁、後唐、後
晉、後漢、後周、
宋、南宋、元、
明。

身合不相應

大義

石合

命際

西洋諸國の帝王も、支那の天子も、國民の間から起つてもしくは權力を以て、もしくは輿望により、遂に帝王の位を贏ち得たのである。素性を洗ひ、祖先を正せば、同等の國民である。これが諸外國國民の王室に對する考であらう。日本人は、皇

王侯將相云云
秦の陳涉の
語

大日本史

三百九十七
卷 神武天皇

より後小松天
皇までの歴

史。徳川光圀
の編纂。

源義朝

爲義の子。保
元の亂に功あ

り。平治元年
反して敗死

す。(一七八三
年—一八三〇

室をばわれわれ國民とは一種別なものと見て居る。支那に
は、王侯將相シヤ有種ラシヤといふ語があるが、日本人は、帝王といふ
位は、國民の決して覬覦キョウオンすべきものでないと、誰も教へはし
ないが、祖先以來さう考へて居る。長い歴史の中には、皇家に
弓を引いた者も無いでは無いが、天子の位をねらふやうな
考は決して無い。大日本史には、源義朝や源義仲が叛臣傳に
入れてある。これは、天子に向つて敵對した事の大義名分を
正したので、これ等の人は別に深い考のあつた謀叛人では
無い。いづれも、皇室の寵を失つた悔しまぎれに、手向した亂
暴人に過ぎぬ。多くは朝廷の或官位を得たいと思ひながら、
それが得られぬ爲に、騒動を起して我儘を通さうといふ輩

源義仲

義賢の子。治
承四年兵を信

濃に擧げ平氏
を西海に奔ら

す。元暦元年
一月粟津に戦

死す。(一一八
四年—一八四

四年)

平將門

真將の子。相
馬小次郎と稱

す。下總に據
りて叛し、天

慶三年誅せら
る。(一一六〇

〇年)

弓削道鏡

河内の人。孝
謙天皇に寵せ

られ、太政大
臣禪師とな

り、遂に法王
の位を授けら

る。光仁天皇
立つや下野薬

師寺別當に貶

で、叛臣と雖も朝廷の尊さを忘れぬものである。平將門も、檢
非違使になれなかつた爲に謀叛したのである。唯一人、弓削
道鏡といふ坊主が、佛法、王法を一つにして、自分がその位に
坐らうといふ不屈な了簡を起したが、忠誠な臣民の聲は、八
幡の神託となつて忽ちこれを排斥した。その外には一人も
無い。藤原氏が廢立を行つたといつても、自分の女の生んだ
皇子を皇位に即かせたいといふ慾望で、これが即ち人間と
しての最大慾望であつた。その慾望さへ達すれば、
この世をばわが世とぞおもふ望月の
かけたることもなしとおもへば。
といつて大満足したのである。(芳賀矢一「國民性十論」)

せらる。(一)
四三年)
廢一廢
この世をばの

歌

藤原道長の
作。

道長は世に御
堂關白と稱

す。その女三
帝一院の配と

なる。(一六二
六年一六八

七年)

五月二十七
八日

明治三十八年
のなり。

朝鮮海峽

九州と朝鮮と
の間の海峽

二一 日本海の新海戦

天祐に依り、わが聯合艦隊は五月二十七、八日、敵の第二、第三艦隊と日本海に戦うて、つひに殆どこれを撃滅するを得たり。

はじめ敵艦隊の南洋に出現するや、上命に基き、これを近海に迎撃する計畫を定め、朝鮮海峽に全力を集中して、徐に敵の北上を待ちしが、敵は一時安南沿岸に寄泊したる後、漸く北行し來れるを以て、豫定の如く數隻の哨艦を南方に配備し、各隊は一切の戦備を整へ、直に出動し得る姿勢を持したり。

果然、二十七日午前五時に至り、哨艦信濃丸の無線電信は、「敵艦見ゆ。東水道に向ふものの如し」と警報せり。全軍踊躍、直に對敵行動を開始せり。

午前七時、哨艦和泉、亦敵の北東に航進するを報じ、片岡艦隊、東郷戦隊、續いて出羽戦隊も、午前十時十一時の交、壹岐對馬の間より沖の島附近にいたるまで、時時敵の砲撃を受けつつ、終始よくこれと接觸をたもち、詳に敵情を電報せしかば、海上濛氣ふかく、展望五海里以外に及ばざりしこの日も、數十海里を隔てたる敵影、恰も眼中にうつれるが如く、既に敵の戦隊はその第二、第三艦隊の全力なること、その陣形は二列縦陣にして、その主力は右翼の先頭に立ち、その他の艦

片岡艦隊
中將片岡七郎
の率ゐたるもの。
東郷戦隊
少將東郷正路
の率ゐたるもの。
出羽戦隊
中將出羽重遠
の率ゐたるもの。

ノット
海里の稱。
Knot 一ノットは
我が約十七
町。

迎へ。

瓜生戦隊
中將瓜生外吉
の率ゐたるも

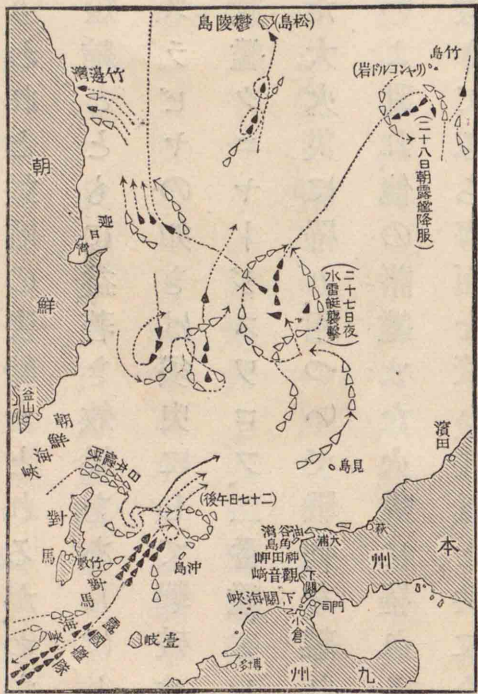


東郷平八郎

まづその左翼の先頭より撃破
せんとする心算を立つるを得
たり。

午後一時三十分、主力艦隊、裝
甲巡洋艦隊、瓜生戦隊、各驅逐隊、
および出羽、東郷戦隊等前後して來り會し、暫時にして、正に
わが左舷にあたる南方數海里に敵影を發見せり。ここに
於いて戰鬪開始の令を下し、わが全艦隊に對し、

「皇國の興廢この一戦に在り。各員一層奮勵努力せよ。」



との信號旗を掲げたり。而して、主戦艦隊は斜に敵の先頭を
壓迫し、裝甲巡洋艦こ
れにつづき、他の諸戦
隊はいづれも南下し
て敵の後尾を衝けり。
これわが豫定戦策な
り。

敵はわが壓迫を避

けて稍右舷に舵を轉じ、ここに砲火を開始せり。我は暫くこ
れに耐へて、距離六千メートルに近づくにおよび、猛烈に敵

オスラビヤ
 Oslabia
 クニヤージ、
 スワロフ
 Kniaz
 Suvaroff
 ア
 レクサ
 ンド
 Imperator
 Alexander
 III

の左右の先頭艦に砲火を集中せり。敵はこれが爲に益東南に壓迫せらるるもの如く、自然に不規則なる單縱陣となり、われと並航の姿勢をとれるが、わが全隊の砲火は、距離の短縮とともに益著き効果をあらはし、その左翼の先頭艦オスラビヤの如きは、須臾にして撃破せられて大火災を起し、旗艦クニヤージスワロフ、二番艦アレクサンドル三世もまた大火災に罹り、相ついで戦列を離れければ、敵の陣形いよいよ亂れ、他の諸艦また火災に罹れるもの多く、炎煙西風に襲きて忽ち海面を蔽ひ、濛氣と共に全く敵影を包みぬ。これ午後二時四十五分にして、彼我の勝敗は既にこの間に決したるなり。

千早
 通報艦なり。
 廣瀬
 中佐。名は順
 太郎。
 鈴木
 中佐。名は貫
 太郎。

鬱陵島
 朝鮮竹邊灣内にあり。

我は煙霧のうちに敵影を發見する毎に、緩にこれを砲撃しつつ敵の前路に出でたれば、敵は俄に變針して、北方に遁走を試みんとせり。我は急にその前路を扼して、再び南方に壓迫し猛射しつれば、敵の諸艦は多大なる損害を受けて、頗る混亂を極めぬ。この間に壯烈なる事蹟として特記すべきは、千早および廣瀬、鈴木の兩驅逐隊が、敵の敗艦スワロフに對し、二回まで勇敢なる水雷攻撃を執行したることなり。かくて我は、洋上に彷徨離散せる殘敵を縱横に搜索して、これが撃沈につとめぬ。この時夕陽すでに春き、わが驅逐隊、水雷艇隊は漸次に敵に逼れるを以て、主戦艦隊は日没と共にひきあげ、同時に本職は、全軍北航して、明朝鬱陵島に集合

をかす(冒)

すべし」と傳令せしめ、ここに當日の晝戰を結了せり。
 この日、朝來南西の強風浪を揚ぐるごとく、夕刻に至りて風やや和ぎたれども、浪なほ靜らず。洋中の水雷攻撃は不利尠からざれど、各驅逐隊および艇隊は、この千歳一遇の時機を失せんを恐れ、皆風濤を冒して日没前に來り會し、各先を争うて敵の周圍に蝟集し、午後十一時頃に至るまで、連續肉薄して激烈なる攻撃を加へつ。敵は探照砲火を以て極力防戦したるが、遂にわが攻撃に耐へず、僚艦相失して四分五裂の状態となり、各一方の血路を覓めんとしたれば、わが追撃のために一場の大混戰を現出し、少くも敵艦三隻は、この間にわが水雷に罹りて全くその戰鬪、航行力を失ひぬ。後日

露國 第三 東洋艦隊

艦種	艦名	噸數	艦種	艦名	噸數
戰	スワロフ	一三五二六	巡	オレグ	四六四五
同	亞歷山三世	一三五二六	同	スウェートラナ	四七七
同	アリヨール	一三五二六	同	ゼムチユーグ	四二二
同	ポロヂノ	一三五二六	同	アルマーズ	四六〇
同	オスラビヤ	一三六七四	同	イズムルード	四一三
同	シツイベリキ	一四〇〇〇	海防	アブラキシン	四二六
同	ナワリーリン	一〇二六〇	同	ワシヤークコフ	四三六
同	ニコライ一世	九五九四	同	セニヤープヤン	四九六〇
裝甲	モノマフ	五五九三	<small>◎この他驅逐艦九、假裝巡洋艦一、特務船六、病院船二隻、(備考)●は撃沈、○は捕獲、△は逃走、◎は逃走後沈没の符</small>		
巡洋	ドンスコイ	六二〇〇			
同	ナヒーモフ	八五四			
同	アウローラ	六七三			

捕虜の言を聞くに、當夜水雷攻撃の猛烈なりしは殆ど言語に絶し、左右應接に遑なく、且その距離あまりに近き爲に、備砲俯角の度を過ぎて照準する能はざりきといふ。
 二十八日黎明、濛氣拭へるが如し。既に鬱陵島附近にありたるわが艦隊は、はやくも東方にあたり、殘隊の煤煙數條あるを發見せり。これ問は

ネボガトフ

Nebogatoff

ピエードウイ

Bedovi

ロゼストウエ
ンスキー

Rozhstvensky

(西曆一八
四八年一
九〇九年)

ずして殘敵の主力たるや明なり。即ち三方よりこれを包圍す。もとより敗餘の敵艦、已に多大なる損傷を負へるのみならず、わが優勢に抵抗し得べきにあらざれば、砲火の開かるるや、須臾にして白旗を掲げ、敵艦司令官ネボガトフ少將は、その戦艦四隻を擧げて部下と共に降意を表しぬ。本職は、特に將校以上に帶劍を許してこれを受けたり。

驅逐艦漣、陽炎は、鬱陵島附近において敵の驅逐艦二隻の遁走し來れるを發見し、極力これに追及して戦鬪を開始したるに、その後續隊は遂に白旗を掲げぬ。これピエードウイにして、敵艦隊司令長官ロゼストウエンスキー中將、およびその幕僚の移乗し居るを知り、その乗員と共にこれを捕虜

となせり。聯合艦隊の大部が北方追撃の戦果を收むるに汲汲たるに、南方、前日の戦場においても亦相應なる殘獲ありて、敵艦數隻を撃滅したり。

抑、日本海を通過せんとせし敵艦隊は約三十八隻にして、わが撃滅、或は捕獲に洩れたりと認むるものは、巡洋艦、驅逐艦、および特務艦各數隻に過ぎず。この二日間の戦鬪において、わが失ひたるものは水雷艇三隻のみ。その他多少の損害を蒙りたるものあれども、一として今後の役務に支障あるものなし。

この大戦における敵の兵力、われと大差あるにあらず、敵の將卒もまたその祖國の爲に極力奮闘したるを認む。しか

もわが聯合艦隊がよく勝を制して奇績を収め得たるものは、一に、

天皇陛下の御稜威の致す所にして、もとより人爲の能くすべきにあらず。殊にわが軍の損失、死傷の僅少なりしは、歴代神靈の加護に依るものと信ずる外なく、嚮に敵に對して勇戦したりし麾下將卒も、皆この成果を見るに及びて、唯感激してそのいふところを知らざるものの如し。

(東郷聯合艦隊司令長官公報による)

二二 機智縦横

一 百人一首の對句

荻生徂徠嘗て小倉百人一首を検して、偶その氏名と歌中の一字とを連結したる、大江千里月の句を得たり。依つてこ

つ記長安も春水の時弦巻
帝玉州おほし備の赤羽洗ふ
若菜の智海 春水

荻生徂徠筆

れが對句を求むれども得ず。偶門人服部南郭來る。徂徠語

るにこの事を以てす。南郭卒然答へて曰はく、春道列樹山とせばいかにと。徂徠手を拍つて妙と叫びぬ。

二、春水の羽織

頼春水は山陽の父にして、學問を以て著れたり。赤貧洗ふが如く、常に白地の古羽織を著し、起居整然たり。或時、友人菅茶山これに戯れて曰はく、われ見ても久しくなりぬ古羽織

荻生徂徠 儒者、名は雙松、通稱總右衛門。江戸の人。古文辭學を唱道す。享保十三年歿す。(二三二六年—二三八年)

服部南郭 儒者、名は元喬、通稱小右衛門。京都の人。最も詩文に長ず。(二三四年—二四一年)

頼春水 儒者、名は惟寛、通稱彌太郎。安藝の人。藩に仕へて學制に功あり。文化十三年歿す。(二四〇六年—二四七六年)

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて樹に満つ。風ある日には、薄青く霞める空より白き花ちらちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散す。

鄰家に花樹多し。風に隨ひて飛花わが庭に落つ。紅雨霏霏、白雪紛紛、見るが中に滿庭花の衣を著く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。庭隅に一株の山梔あり。五月闇鬱陶しき頃香しき花を開く。主も妻も無口なれば、この花のわが家に開くはうべなりけり。

教ふ。

老李の背後に一株の碧梧あり。その幹亭亭としてすこしの曲なく、わが如く直かれと教ふるに似たり。これと手水鉢

の側なる八角金盤とは、葉廣うしてわが家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉のころろと地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。つくつくぼふしの聲に、世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃えいで、ただ一株前の家主の植ゑ残したる黄菊も咲きいづ。名苑の花美しといふとも、秋のあはれ、閑寂の趣は却つてわが庭の一枝にあるべし。蛻巖の翁ならば、獨憐細菊、近荆扉とや吟ぜん。恥づらくは、海内文章落布衣と唱すべき身にあらざること。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くしては滿樹黄金よりも黄なり。木枯の風起れば、その葉翩翩として翻り落つ。半夜夢さ

蛻巖 梁田氏。名は邦美、新六と稱す。明石藩の儒者。最も詩に長ず。寶曆七年歿す。二二三三二年一四一七年。獨憐細菊云云。蛻巖の九月九

日の詩に「琪
樹連雲秋色
飛、獨海細菊
近、霜屣登高
能賦今誰是、
海内文章落、
布衣。」

サー、ウォー
ター、ローレ
イ
Sir Walter Raleigh. |
エリザベス
時代のイギ
リスの航海
家、著述家。
西暦一五六
二年一五六
一八年)

めて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色と
なりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、
紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人はいふなる錦を、我は庭に敷
きつめぬ。

木の葉落ち盡しては流石に寂しげなれども、日影、月影、い
よいよ多くなりて、空を見、星を見るに障なきは嬉し。

(徳富蘆花「自然と人生」)

二四 観察と實驗

サー、ウォーター、ローレーが、ロンドン塔に囚れて居た時
のことである。或日、庭上で見知らぬ男が二人、劇しく喧嘩し

て居るのを獄窓から眺めて、どちらがその張本人であるか
見當をつけた。そして牢番が來た時その事を話すと、牢番は、
ローレーの見た張本人は全く罪のない方で、おまけに重傷
を負はされたと告げた。これを聞くや否や、彼は矢庭に振り
向きざま、机上の紙片を火に投じてしまひ、そしていつた、自
分は實は今或歴史を執筆中だが、現在眼の前の出來事さへ
見謬るやうでは、過去のしかも遠く隔つた國土に起つた事
柄の真相を傳へるなどは到底覺束ない」と。

事物を観察してその真相を捉へることは、頗る困難な事
業である。アナトール、フランスがいつた「顯微鏡は肉眼の誤
謬を擴大するものだ」といふ皮肉も、一面の眞理といはねば

アナトール、
フランス
Anatole France
フランスの
詩人、文學
者。(西暦一
八四四年一
一九二四
年)

チチアン
 Vecellis イタリーの
 畫家。(西曆
 一四七七年
 一五七五
 年)
 Tiziano

ならぬ。吾人の觀察は誠に欺かれ易く、また頗る怪しいものである。しかも科學の第一條件は、事物を正確に觀察する事である。畫家のチチアンは、普通の人の見る一色の中に五色を區別し得たと傳へられて居るほど、色彩に關する感覺が鋭敏であつた。そして物の觀察は五官の感覺に始るのであるから、觀察力は既に先天的に人人に相違のあることは否み得ない。

昔から優れた學者は、いづれも鋭敏な觀察力を持つてゐた。書を讀めば眼光紙背に徹する鋭さがあつた。この觀察力といふ出發點が誤つたならば、學問は成立しない。誤つた觀察によつて得た智識は虚偽である。しかもその虚偽な智識

コペルニクス
 ポーランド
 の星學者。
 Copernicus
 數學家。(西
 曆一四七三
 年—一五四
 三年)
 アリスタルコ
 ス
 ギリシヤの
 アレキサン
 ドリア學派
 の天文學
 者。(西曆前
 二八〇年—
 前二六四
 年)
 小酒井不木
 名は光治。醫
 學博士。慶應
 大學教授。

寛永寺
 東京市上野公
 園内にあり。
 東叡山と號
 す。關東天台
 宗總本山。

が眞正のものと考へられて居た場合が尠くない。コペルニクスが出るまでは、地球が中心となつて、天が動いてゐると考へられてゐた。既にギリシヤの昔、アリスタルコスが地動説を樹てたけれども、その後再び地球中心説が唱へられ、コペルニクスに至つて動かぬものとせられたのであつた。今日我我があたりまへのやうに思つてゐる智識も、先人の尠からざる努力によつて贏ち得られた、尊い賜であることを忘れてはならぬ。(小酒井不木—學者氣質)

二五 わが幼時

わが幼き時、上野物語といふ草紙ありけり。これは寛永寺

の花見に、人の群れ来る事どもを記せるなり。わが三歳の春の頃、火燧に足をさして腹這ひ居て、その草紙を見ながら筆紙を求めて透寫しけるを、母人の見給ひて、十の中一二はま



新井白石

ことの文字もありければ、わが父に見せ参らせけるを、父の友人の來ては見けるより、人人も聞き傳へて、その寫したる物どもを取り傳へてめではやした

りき

その後は、常の戯に筆執りて物書く事のみをしければ、おのづから日に文字をも見知りたれど、物讀む師友とすべ

戯一戯

父
名は正濟といふ。

往來物

日用文を集めたる書の稱。

戸部

上總國久留里の藩主土屋民部少輔利直。

戸部は民部省の唐名。

太平記評判

五十卷あり、和田助則の作といふ。

き人なかりければ、只往來物の類などを讀み習ふのみなりき。戸部の家人に、富田とて生國は加賀の國の人と聞えけるが、太平記評判といふ書を傳へて、その事を講ずるあり。夜々に、わが父など寄り合ひつつそれを聽聞せられけるが、わが四五歳の時、常にその座に侍りけるに、夜いたく更けぬれど、終に座を起つこともなく、講畢りぬれば、その義を請ひ問ふことなどもあるを、人人、奇特のことなりといひあへりき。

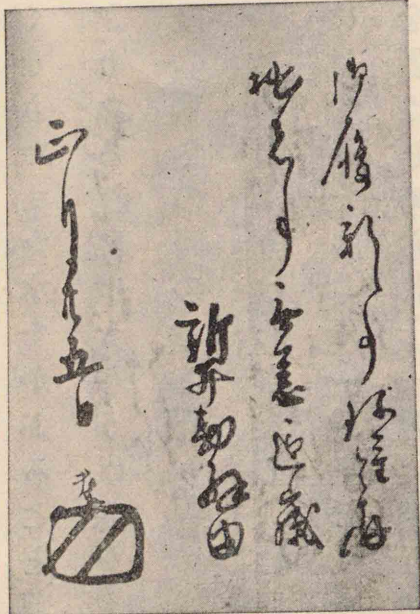
六歳の夏の頃、上松といふ人の少しは文字などありけるが、七言絶句の詩三首まで教へて、その意を解き聞かせられければ、やがて誦を成して、そを人にも吟じ聞かせたりき。この兒才あり。いかに師を擇びて學ばしめらるべしなど、か

をさなし(幼)

かなふ(協)

の人もいひけれど、頑なる昔人等のいひけるは、「昔より」利根、
 氣根、黄金の三こん無くては學匠になり難し」といふなり。こ
 の兒、利根こそうまれ付きたらめ、尙幼くしてその氣根の程
 も測り難く、家富めりとも見えねば、黄金の事も心得られず
 などいひあへるに、わが父も、戸部の御いつくしみ深く、常に
 御側を離し給はねば、學に入り師に従はしめんことも協ふ
 べからず。されど彼の、幼きより物書くことをば、人人に語り
 誇らせ給へるなれば、せめては物書き習ふことのみはせさ
 せたきものなり」とて、わが八歳の秋、戸部の上總の國に往き
 給ひける後に、手習ふことを教へられけり。その冬の十二月
 に戸部歸り給ひければ、常に傍に侍ふこと元の如く、明年の

秋また國に往き給ひける後にて、課を立てられて、日の中に
 は行草の字三千字、夜に入りて一千字を限りて書き出すべ
 し」と命ぜられたり。冬に至りぬれば日短くなりて、課いまだ



新井白石筆

満たざるに日暮れんと
 すること度度にて、西向
 なる竹縁の上に机を持
 ち出でて書き終へぬる
 こともあり。又夜に入り
 て手習ふに、睡の催して
 堪へ難きに、我に附けられたる者と、窃に議りて、水二桶づつ
 かの竹縁に汲み置き、いたく睡の催しぬれば、衣脱ぎ捨てて、

まづ一桶の水をかぶりて習ふに、一時はその冷なるに目覺むる心ちすれど、しばし程經ぬれば、身暖になりて、またも睡くなりぬ。また水をかぶること前の如くして、二たび水をかぶりぬる程には、大やうは課をも充て得たりき。これわが九歳の秋冬の間のことなり。

この頃よりは、わが父の人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたりき。十一歳の秋、また課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の内に淨寫して參らすべし」と命ぜられ、さて命の如くに事を終へつれば、册になして戸部に見せ參らするに、褒め給ふこと大方ならざりき。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふほどの文ども、大方

庭訓往來
玄憲法印の作
といふ。十二
箇月往復の書
簡文なり。

は我に命ぜられき。

又十一歳の時に、わが父の友なる關某の子は、太刀打の技に勝れて、人に教ふることのあるを、我にもこの技教へられんことを望むに、わぬしいまだ幼し、これらの技學はんこと早かりといふ。さこそは侍るべけれど、太刀使ふこと少しも心得ざらんには、刀脇差腰にせんこと不用のことにや」といひければ、そのいふ所實にことわりなり」とて、一つの技を傳へて習はしめられけり。

かかりし程に、その年、十六になれる者の、我と武藝を試みんといひければ、木刀を取りて三度合ひて三度まで勝つことを得たりき。その後は、常にかかる武藝のことどもを好み

新井白石

徳川幕府の儒臣。名は君美、通稱勘解由。徳川家宣に仕へて輔翼の功多し。後致仕して著述につとむ。詩文に長じ、歴史に精し。享保十年卒す。(二三一七年―二三八五年)

二六 一燈錢

(新井白石「折たく柴の記」)

て、手習ふことなど心にも染めずありけれど、物讀むことは好みければ、わが國の物語、草紙等の類をば殆ど見盡せり。

この度同社中申しあはせ、自分自分の力を盡し、骨を折りて、瑣細の事ながらも相儲け置きたきことに候。非常の變不意の急にさし懸り候はんにも、囊中拂底にてはさし支ふるものに候。有志の人の牢獄に繋かれ、又は飢渴に迫り候者も、おひおひ相助けたく、義士、節婦の碑を立て、墓を築く等にも、力を盡し、手を伸したきことに候

松下塾

山口縣阿武郡松本村なる吉田松陰の塾。

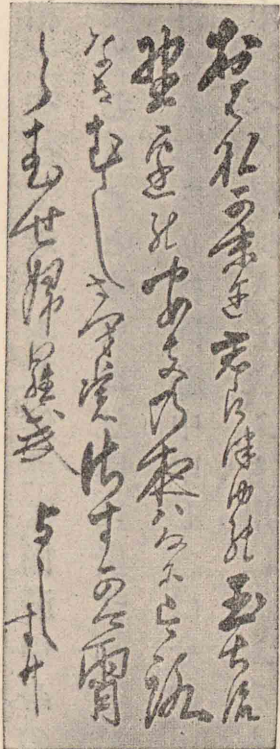
貧者の一燈

昔、佛に、王は萬燈を、貧女は一燈を供へたるに、王の萬燈は風のために消え、貧女の一燈のみは消えざりきと佛經に見えたる故事。

へども、同社中有餘の金もあるまじきことに候へば、毎月寫本なりともして僅の貯蓄致し置きたく、月末、松下塾まで銘銘持ち寄り致すべく候。半年にもせよ、一年にもせよ、塵も積れば山となる理にて、きつと、他日の用に相立つべく考へられ候。尤も、同社中身の膏を搾り出して集むることなれば、迂闊に費すべきにあらず。己むを得ざる事あらば、同社中申しあはせの上にて、取り計ひ申すべく候。抑、人を救ふも、用に備ふるも、富貴長者の身ならば、尙如何様にも相計ふべけれど、我我にては、かくまでにするは、貧者の一燈とも申すべきことに候。至誠の貫かぬ理はよもあるまじく候。これに依つて、この度

取り立て候金を一燈錢とは名付くるにて候。
 一、毎月寫本六十枚づつ、村塾まで必ず持ち寄るべく候事。

先師
吉田松陰。



久阪元瑞筆蹟

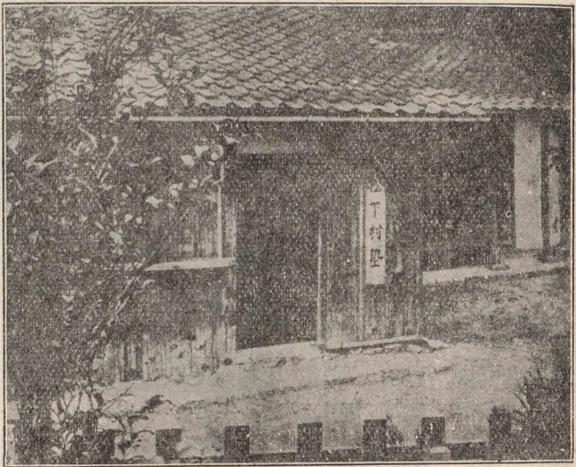
一、寫本料
 は、先師の
 定むる所、
 眞字、十行

二十字五文、片假名、同斷四文の事。

一、一日僅に二枚づつの事なれば、さまで勉強のならぬことはあるまじ。もしこの枚數不足の時は、代を以て相償ひ必ず持ち寄りこれあるべき事。

をしみ(齊)

久阪元瑞
 名は通武、通稱義助。吉田松陰門下の勤王家。元治元年京都に自殺す。(二四九九年—二五二四年)



右の條條この度申しあはせ候。これ式のことに骨を容み候ほどにては、我我の至誠つらぬき候ことも覺村東なく候やう相考へられ候。銘銘きつと怠らぬやう致したきことは、申すもおろかに候。以上。(久阪元瑞)

二七 吾輩は猫である

吾輩は猫である。名前はまだ無い。吾輩がこの家へ住みこ

んだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても撥ねつけられて、相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重せられなかつたかは、今日に至るまで、名前さへ附けてくれないので解る。吾輩は仕方がないから、出來得るかぎり、吾輩を容れてくれた主人の傍に居ることをつとめた。朝、主人が新聞を読む時は、必ず彼の膝の上に乗る。彼が晝寢をする時は、必ずその背中に乗る。これは、あながち主人が好といふ譯ではないが、別に構手がなかつたから、己むを得ぬのである。その後、色々經驗の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は縁側に寝ることとした。しかし、一番心持の好いのは、夜に入つてこのうちの子供の寢床へもぐり

込んで、一緒に寝ることである。

この子供といふのは、五つと三つで、夜になると二人が一つ床へはひつて、一所に寝る。吾輩はいつでも、彼等の中間に己を容るべき餘地を見いだして、どうにか、かうにか割り込むのであるが、運悪く子供の一人が眼を醒すが最後、大變な事になる。子供は殊に小さい方が質が悪い。「猫が來た、猫が來た」といつて、夜中



夏 日 漱 石

でも何でも大きな聲で泣きだすのである。すると、例の神経衰弱性の主人は必ず眼をさまして、次の部屋から飛びだしてくる。現に先達てなどは、物指で尻べたをひどく叩かれた。

吾輩は、人間と同居して彼等を觀察すればする程、彼等は我儘なものだと斷言せざるを得ないやうになつた。ことに吾輩が時時同衾する子供の如きに至つては、言語道斷である。自分の勝手な時は、ひとを逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつつひの中へ押し込んだりする。しかも、吾輩の方で少しでも手出をしようものなら、家内總がかかりで追ひ廻して迫害を加へる。この間も、一寸疊で爪を磨いたら、細君が非常に怒つて、それから容易に座敷へ入れない。臺所の板の間で、ひとが顫へて居ても、一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君などは、逢ふ度毎に、人間程不人情な者はないといつて居る。白君は先日玉のやうな子を

四疋産んだのである。所が、その家の書生が、三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて、四疋ながら棄てて來たさうだ。白君は涙を流して、その一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして、美しい家庭的生活をすることは、人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬといつた。一一尤の議論と思ふ。

又、隣の三毛君などは、人間は所有權といふことを解して居ないといつて、大いに憤慨して居る。元來、我我同族間では、目刺の頭でも、鯨の臍でも、一番先に見付けた者がこれを食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手がこの規約を守らなければ、腕力に訴へてよい位のものだ。然るに、彼等人間

は毫もこの觀念がないと見えて、我等が見付けた御馳走は、必ず彼等のために掠奪されるのである。彼等はその強を恃んで、正當に我等が食ひ得べき物を奪つて澄して居る。白君は軍人の家に居り、三毛君は辯護士の主人を持つて居る。吾輩は學者の家に住んで居るだけ、こんな事に關すると、兩君よりもむしろ樂天的である。唯その日その日が、どうにかかうにか送られればよい。いくら人間だつて、さういつまでも榮えることもあるまい。まあまあ氣を永く、猫の時節を待つがよからう。

しかし、吾輩は人間の不徳に就いて、これよりも數倍悲むべき報道を耳にした。

或日吾輩は、車屋の黒と暖い茶畑の中で、寢轉びながら色雜談をして居ると、黒はいつもの自慢話を、さも新しさうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下の如く質問した。おめへは今までに鼠を何匹とつた事がある。智識は黒よりも餘程發達して居るつもりだが、腕力と勇氣とに至つては、到底黒の比較にはならないと覺悟はして居たもの。この間に接したときは、流石にきまりが好くはなかつた。けれども事實は事實で、詐る譯には行かないから、吾輩は、實は捕らう捕らうと思つて、まだ捕らないと答へた。黒は彼の鼻の先からびんと突つ張つて居る長い髯を、びりびりと震はせて、非常に笑つた。元來、黒は自慢をするだけに、どこか足りない所が

いつはる(詐)

あつて、彼の氣焔を感心したやうに、咽喉をごろごろ鳴して謹聽して居れば、甚だ御し易い猫である。君はあまり鼠を捕るのが名人で、鼠ばかり食ふものだから、そんなに肥つて色つやがよいのだらう。黒の御機嫌をとる爲のこの質問は、不思議にも反對の結果を呈出した。彼は喟然として大息して「いふ、かんげへると詰らねえ、いくら稼いで鼠を捕つたつて、一てえ、人間程ふてえ奴は世の中に居ねえぜ。人の捕つた鼠をみんな取り上げやがつて、交番へ持つて行きあがる。交番ぢや誰が捕つたか分らねえから、そのたんびに五錢づつくれるぢやねえか。うちの亭主なんか、己の御蔭で、もう壹圓五拾錢位儲けて居やがる癖に、碌な物を食はせた事もありや

獵—猫
夏目漱石
文學者。東京
の人。名は金
之助。東京帝
國大學英文科
出身。東京帝
國大學講師た
りしが後辭し
て東京朝日新
聞に入れり。
大正五年十月
歿す。(二五二
七年—二五七
六年)

しねえ。おい、人間てもものあ體のいい泥棒だぜ。さすが無學の黒もこの位の理窟はわかると見えて、頗る怒つた様子で、脊中の毛を逆立てて居る。吾輩は少少氣味が悪くなつたから、いい加減にその場を胡魔化して家へ歸つた。この時から吾輩は決して鼠を捕るまいと決心した。然し黒の子分になつて、鼠以外の御馳走を獵つてあるく事もしなかつた。御馳走を食ふよりも、寝て居た方が氣樂でいい。教師の家に居ると、猫も教師のやうな性質になると見える。要心しないと今に胃弱になるかも知れない。(夏目漱石—吾輩は猫である)

二八 邯鄲夢

開元 唐の玄宗の時。我が聖武天皇の朝にあたる。
邯鄲 今の直隸省邯鄲縣。

開元十九年の事です。呂翁といふ行者が邯鄲の町のあたりを通つて、ある宿屋に休みました。自分の床を用意して、囊を背負つて坐りこみました。そこへ、近所の若者で盧生といふ者が、見すほらしい風體で、小馬に乗つて田へ出る途中、同じ宿屋にたち寄りました。呂翁の傍へ腰を掛けて、心安げに話し合ひました。

盧生は穢い自分の身なりを見廻して、と息をつき、「男と生まれながら不仕合な身の上、ほんとに厭になつてしまふ」といふのを聞いた彼の老人、「お前さんの骨柄といひ肉附といひ、元氣に充ちた男盛、さも氣樂さうに見えるのに、何をそんなに氣を腐らすのかね」と尋ねました。

「ただ生きて居るといふだけで、ちつとも氣樂ぢやありませんや」と盧生がいへば、彼の翁、それだけ氣樂にして居れば、その上の氣樂はなからうぢやないか」といひました。盧生は



邯鄲の夢 (筆山華)

重ねて、立身出世して、好き勝手を暮しができて、自分も満足、側も賑へば

こそ、それがほんとの氣樂といふものさ。わたしも學問や身だしなみを心がけて、末は貴人となるつもりで居たが、もう

三十を越したのに、いまだに野らかせぎに追はれて居る。こんな不仕合があるもんかね」といひながら、さも厭になつたといふ風で、ぐつたりしてゐました。

その時、宿の主が、粟を蒸して食事の支度をして居ましたが、呂翁は囊の中から枕を一つ取り出して、盧生に渡し、「この枕をして、ちよつと寝て御覽。お前の思ふやうな身分になれるから」といひました。

その枕は焼物で、兩方の端に穴が開いて居ます。盧生は何の氣なしに、横になつて枕をしました。うとうとする中に、枕の穴が大きくなつて、中が明るく、廣廣してゐるやうに思はれたので、物好にすうつと入つて見ました。

いつしか自分の家へ來ました。そして盧生は妻を娶り、贅澤に暮しました。翌年進士の試験に優等で及第し、それから段段と立身を重ね、陝州の刺史になつた折には、黄河の水運を改良して、土地の人から大層あり難がられました。やがて地方の大官から、轉轉して都の長安のつかさとなり、更に夷狄征伐を命ぜられて大功を建て、土地を開き、城を築き、北方邊土の住民に重んぜられました。その勳功に由つて益出世しました。が、あまり評判が高いたので、時の宰相に厭がられ、讒言されて役を貶されました。それも一時の事で、復び朝廷に召されて、自分が宰相の一人に加へられる事になりました。宰相となつてからの評判も、すさまじい程であつたので、

陝州
今の河南省の中。
刺史
唐代の地方官。今の府縣知事にあたる。
長安
今の陝西省長安縣（もと西安府）

あわて(慌)

同僚の者に悪まれて謀叛の讒言に罹り、牢屋へ投げ込まれる事になりました。召捕の役人が飛び込んで来たので、盧生は驚き慌てて、妻子に向つていふには、「私の故郷は山東で、いくらかの田地もあり、暮しだけは立てて行けるのに、立身したさに、こんなはめになつてしまつた。あの氣安い身なりで、可愛い小馬に乗つて、邯鄲のあたりをぶらつかうと思つても、もうだめだ」と泣きながら自殺しようと思つたが、妻に押し止められてその場を逃れ、人にかくまはれて居る間に、やつと罪を赦されました。

二三年経つ中に、無實の罪だといふことが判つて、又又立身して前に劣らぬ榮華を盡しました。子息は五人、孫が十餘人もできて、何不足なく思のままに振舞ひました。氣が弛んで來ると、又遊び暮してのみ居るやうになりました。然しそれも限のある事、愈年を取つて來たので、もう隱退しようと思ひましたが、天子の御許が出ません。その中に病氣になつて、上からの御見舞も手厚く戴きました。けれども壽命です、もう自分もこれまでと覺悟して、天子へ上書して、かういふ事を申し上げました。

「私はもと山東の卑しい者で、田畑の稼業に身を入れて居りました。治る御代のあり難く、私ごとき者まで役目を授かり、その上格別の御恩を受けました。或時は軍の指圖、又或時は政治の頭、役目大事に年を重ねました。大恩を戴き

ながら、何の目ぼしい手柄も立てず、只只御代に事無かれとのみ胸を痛めて居りました。さうして月日が積り積つて、私はもう八十を越えました。身も疲れ力も弛み、この上の御奉公は、何分にも心もとなく存じます。思へば、この身のふがひなさを、御報恩も思ふに任せず、このまま御別れ申し上げるのは、口惜しいとも残念とも申しやうがありません。偏に御察しを願ひ上げます。」

これに對して、かういふ詔を下されました。

「これまでの忠勤如何にも感じ入る。地方の事、政治の上、汝の功勞に由つて、世の太平も久しく續いた。近頃病氣の由、全快も程近からうと思つて居たに、氣の毒の至である。今

見舞として使者をさし遣す。十分加療して大切に致せ。一日も早く全快するやう、吉報を待つて居る。」

臨終の際にも、わが身の果報を思ひ返して、嬉しやと思ふ程も無く、遂に歸らぬ旅に出で立ちました。

夢心地の中に、盧生は欠伸をしながら眼を覺しました。自分は今しがた死んだと思つたのに、よく視ると、宿屋の中に轉がつて居ります。呂翁もちやんと傍に居ります。あるじの粟はまだ蒸し上りません。どこを見廻しても元のままです。はつと思つて起き上り、「そんなら今のは夢であつたか」といひますと、呂翁は笑ひながら、「人の身の上もそんなものさ」と申しました。盧生はぢつと考へ込みました。やがて語を改め

松井等
東京の人。東
京帝國大學東
洋史科出身。
國學院大學教
授。

て「お蔭で何事も判りました。私の至らぬ慾念を塞いで下さつたのです。御意見はしみじみこの胸にこたへました」といつて、丁寧に挨拶して立ち去りました。(松井等「傳説之支那」)

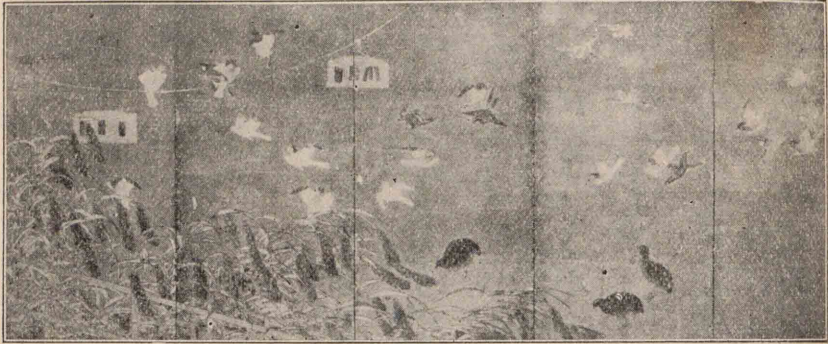
二九 小鳥

夕方になつてから、家の周囲を歩いてゐると、椿の葉の中で、ばさばさと埒をもとめてゐる小鳥の羽音が聞える。

地の上には、雪がまだ解けないでゐる。地はからからと凍りついてゐる。

小鳥は、人が近づいて行つた登音に警戒するかのやうに、ちよつと羽音を止めることもある。

やれうつな愧か手
とすするはとす
お小とまよあえや
軟うるい雀
雀の子さこけり
お鳥が通る
やせか(る)るり
な(る)るり



群鳥 (狩野山樂筆)

しばらく立ち止つてゐると、再び小鳥の動いてゐる音が聞える。それは雪に包まれてしまつた地の冷さを想はせる程、ほんたうにほのかなうらさびしい聲である。たまたまなく寒い聲である。

「小鳥よ、おいで、私の部屋まで。私の部屋には爐があるよ。暖い私の部屋に來て、一晩とまつて行かないか。」

私はさういつて椿の下の小鳥に話しかけて見たいと思ふ事もある。

私はちつと椿の傍に立つてゐる。日がだんだん暮れて行つてしまふ。椿の葉の蔭が眞暗になつて行く。

地の雪が闇のなかに幽になつて行く。空の風も止んでしまふ。

椿のなかの小鳥もめつたに羽音をさせなくなる。小鳥も眠つたのであらう。

雪の上には星がまたたき初めた。

「寒いだらう！小鳥は……」。私はさう思ひながら、私の部屋にはひつて行く。

何故人間と小鳥といふものが、話もしないで、別別な世界に住まなければならぬのか。

はひつて

私は部屋にはひつてからまで、こんなことを考へることがある。悪い人間は滅びても、可憐な小鳥はいつまでも幸福であれと私は思つてゐるのに、私と小鳥とはいつも別別である。(吉田絃二郎「雜草の中」)

三〇 流行火事 その一

安積近郊一帯に、冬早が五十日近く續いた。

いつもは、もう村村を一尺は埋めてしまふ雪が、只西山を白く輝すだけで、どうしても脚を里まで届かさな。濃い青鼠の雲が五靈櫃峠を蔽ふたびに、村人は爐邊から出て西の空を瞻望する。けれどもそれは瞬く間にちぎれ飛んで、後に

安積
福島縣安積郡

五靈櫃峠
同郡にあり。
會津へ通ずる
間道なり。

は黯ずんだ光の漲る凄い冬空を鮮に残すのみである。

村村を綴る野は眞つ平にからびきつた。そしてからつ風の吹き通すままに緑といふ緑は悉く吹き散されて、褐色と黄色との斑を織るに過ぎない。杉も年の變るのを待たずに黒茶けてしまつた。鎮守様の杜の上では、鴉が毎夕嘎れた聲を立てて落暉の中を舞つた。

「かういふ乾いた時に火事でもなけりやいいが。村の古老達が或日唧筒小屋に集つて語り合つた。すると、彼等の口から出た杞憂の言が終らぬ中に、鄰村の警鐘がチャン、チャン、ヂャンと三つ鳴つた。他區應援の鐘の音である。それつといふので、皆がばさばさした街道へ駆け出して見ると、北風の

絶間を縫つて、遠い火元の村の半鐘も聞える。いつもより近く見える西の野の果に、低い一帯の黄煙が見える。それが高く立ち昇つた處は、吹き散されて只杉と丘との間に濃い黄色な幕を引いてゐるのである。



久米正雄

「十七年前もかうだつた。こりや又火事が流行らなければいいが。村の古老はまたかういつた。すると翌日から、近在に日に日を

次いで火事が起つた。大槻村も焼けた。富田村も焼けた。山野井村も火を出した。小原田村も大半焦土と化した。この平唯一の都會たる郡山町でも、一夜に五度の出火があつた。夜に

大槻村、富田村、山野井村、小原田村、郡山町、桑野村、共に福島縣安積郡

さへなれば、風の吹く方向に従つて、この平野を、ひびのいつたやうな古い半鐘の音が縦横に流れわたつた。中には放火もあるとの噂だつた。

かうして到る處に、火事が流行つて、燃えない村は無い中に、只桑野村だけは、まだ一度もその災害に會はなかつた。それで村人は枕を高くしてゐるかといへば、決してさうではなかつた。彼等は一度火災のあつた村の人人よりも、ずつと戦戦兢兢としてゐた。中には、どの家かが一度焼けてしまへば、荒神様の呪に對して一應の義理が濟むと思ふ者すらあつた。

その中に誰いふとなく、十二月十七日には、愈桑野村にも

大火があるといふ噂が立つた。郡山でも、噂のあつた日に五箇所の出火があつたのだつた。小原田も、話のあつた晩の小火から引き續いて、半村を灰燼に歸するやうな大火を導いた。かうなつて來ると、桑野村の人人もこの噂を信じなければならぬ。

然し、茲に只一人その噂を信じない男があつた。それは村の三等郵便局で雇員に使はれてゐる平吉といふ若者であつた。何故信じないかといふと、その噂は不意に思ひついた悪戯心で、彼自身が拵へたものであるからであつた。

村の人人は、誰もこの十七日といふ呪はれた日が、雇員の月例にしてゐる休日であることを知らなかつた。只村の四つ

角に小さい鏡を据ゑた床屋ばかりが、この自分の休日を下らない火事騒に費さなくちやならないので腹を立てた。

愈呪はれた十七日が来た。冬だといふのに、朝から氣味が悪い程晴れ渡つた。太陽が南の方に小さく、それでも村の人の目にはいやにぎらつていて照つてゐた。朝早く村役場からお布告が出た。よぼよぼの小使が、飴色の頭を振りながら持つてまはつた紙片には、告諭第十七號といふ題目の下に、村人の見馴れた書記の肩あがりの字が、謄寫版でかう刷つてあつた。

昨今火事流行の折柄、幸に本村のみは類焼を免れ、今日まで平穩に過ぎたる事、これ偏に本村防火設備の發達と、村

hamazaki

虚—虚

民の周到なる注意の致す所と、吾人共に喜びゐたる次第なるが、茲に忌むべき不祥の噂は起れり。曰はく、本十七日を以て、愈本村にも火災起らんと、これ一の虚聞に過ぎざるべし。されど虚より實を生じたる事、これを遠く古來の歴史に探るに及ばず、近く例を郡山、小原田に徴すべし。本村長は一應の職責を以て、村民一同も特に今日は火災に對し、慎重の注意あらん事を望む。

といふのである。

小學校は朝から休んだ。そして錆のついた消火器が、教員室の隅の棚から下された。丁度當直に當つた代用教員は、勿體なくも御眞影と教育勅語とを安置した箱に、すはと云は

ば運び出されるやうに細引をかけた。

家家ではそれ相應の家財を片附け始めた。さうして夕方までにはすつかり片附いて、何時來てもいい火事を待ち設けてゐた。

雇員の平吉は、自炊してゐる裏の六疊から出て、何氣なしに表の局を覗いた。すると、いきなり局長にかういはれた。

「やあ平吉、いよいよ今夜になつたな。道具はもう片附いたか。」

何故か彼は赤面した。然しすぐその後から意地の悪い快味が頭をもたげて、彼は訊ねた。

「一體火事はほんとに今夜あるんでせうか。」

「あるともあると思はなくちやならない。」

これが力を籠めた主人の答であつた。

「では私も片附けるとしませうか」といひながら、彼は局を出た。けれども、勿論眞直に自分の室へは歸らなかつた。彼はぶらぶら村の友人でも訪問して歩かうといふ氣で、街道の方へ出た。すると何時も森閑としてゐる家家が、色色な錯綜した音を立てて騒いでゐる。街道の兩側には、處處黒光のする戸棚などが運び出されてある。彼は少し吃驚して立ち止つた。

平吉はまた歩き出した。そして村はづれまで來ると、その自然木の門を入つて村長の家を訪れた。

氣一気

村長の息子は、今年二十七になる彼と同年輩の青年で、去年某大學の政治科を出た村の秀才であつた。平吉は、この人なら新時代の教育を受けた青年だから、まさかに噂を信じまいと思つた。そして信じないとすれば無論暇だらうから、大いに天下の形勢でも談じようと思つたのだ。

處が、彼が「失敬」といつて、何時も通り馴れてゐる庭から息子の書齋へ通ると、

「いやあ、君はもう済んだのか。僕は忙しい最中だ」といひながら、息子は二三の書籍を重ねてばたばたと塵を拂つた。

「ほんとに火事はあるんだらうか」。彼は其處に立つたまま、呆然と獨語に似た質問を發した。この時の彼の心には、もう

皮肉な微笑は消えてゐた。そしてこの自分の言葉が、自分以上の何物かが、自分を通じて問うてゐるかのやうに響いた。

「そりやあるさ。なくともあると思へば間違ないからな。これが友人の力を籠めた答であつた。

「ぢや失敬」といひながら、平吉はまたぶらぶらと其處を出た。そして、更に新しい遊相手を物色しなければならなかつた。彼は寺へ行かうかと思つた。あの學問のある和尚なら、佛力は頼んでも、そんな迷信を持つてゐはしないだらう。そして二人で悠悠と碁でも圍まうと考へた。

和尚はいつものとほり、方丈に悠然と坐つてゐた。平吉はそのゆつたりした腹部と、顔に浮んだ歡迎の微笑とを見る

と、ひどく頼しげに感じた。

「やあ平吉さんか、よく來なすつた。家がもうちやんと片附いたんで、安心立命してやつて來なすつたのだな。」

「どういたしまして。」平吉は頭を掻きながら答へた。そして和尚の周圍を見廻した。だが此處も片附いてはゐませんな。」

「ああ、誰も片附手が來てくれないから放つておいた。この本堂ももういい加減古くなつたから、一炬に附した方がましな位だて。俺は先刻から再建の胸算用をしてゐる。」

「へへえ。」平吉は呆れて和尚の顔を見つめた。するとその拍子に、我にもあらず問を發したくなつた。

「ほんとに火事があるんでせうか。もし誰かがいい加減に

いひ觸したとしたらどうでせう。」

平吉は勇を鼓して訊ねた。

天は人をして
云云
文徳實錄に、
「天無口假
人口。」

「天は人をしてこれを言はしむ。その人がいい加減でいつた事でも、眞實になる事はいくらでもある。」

平吉は眞青になつて、「御免」といひながら寺を驅け出した。一二時間過ぎてからの平吉は、僅な身のまはりの道具と自炊用具とを一生懸命に片付けてゐた。

三一 流行火事 その二

太陽が赤く沈んで、いよいよ待ちに待つた夜が來た。すると今まで止んでゐた風が、急にがうがうと北から吹いて來

た。

村の消防隊に屬する若衆は、皆唧筒小屋に集つた。厚衣絆サシフを纏うた逞しい人たちが、唧筒の傍に整然と蹲つてゐる。去年の春の消防演習で縣から下賜された金馬簾が、夜目にも燦と光つて見えた。

灯といふ灯、火といふ火を悉く消した一村の人人は、爛爛たる星空の下で、吹き渡る風の音を聞きながら、不安と沍寒とに顫へてゐた。男達は何するともなく闇の中に右往左往して、互に短い叫聲で語り合つた。

夜は風の音の斷續と共に深みわたつた。しかもそれは何事もなく過ぎ去りつつあつた。村の人達も、何時とはなしに

唧筒小屋の周圍に集つて來た。火氣のない暗闇の中に顫へてゐるより、多人數の中に入り交つて、逞しい消防隊の準備を眺めてゐるのが、いくらか各人の心に頼しく感ぜられるのだつた。それでも寒さは遠慮なく各の肌を刺した。

「ああ、火が焚きたいなあ。誰かが闇の中で呻つた。皆はどつと干乾びた笑聲を擧げた。そして各自分の心持をいひあてられた人のやうに、顔を見合はせて苦笑した。

「そんな事いつちやいかん」消防の小頭が、叱るといふより願ふやうな顔でいつた。彼も亦切に焚火を欲してゐるのがその聲音でもわかつた。

さうかうする中に、東の空の星が流れて、永い冬の夜も白

白と明けかかつた。風も物に吞まれたやうに、はたと止んでしまつた。

「もう大丈夫だ」と、人人は曉の光の中で互の吐く息の白いのを見やりながら、心中で獨語した。然し安心と同時に、漠然とした不満が各の心にあつた。これだけの用意と、これだけの緊張とで待ち設けた夜が、何事もなく明けて行くのだ。

「畜生、何の事だい。」人人の心には、ある憤激に似た狂暴が募つて來た。

「どうだい、もう焚火をしようぢやねえか。」一人が明に誰かにあて附けるやうな口調で慳貪にいつた。何者とも知れぬあるものに、漠然と憤つてゐるのだつた。

さうだ、やれやれ。昨夜からの分を取り返すがいい。どんどん焚いちまへ。他の聲聲がまた慳貪に應じた。

もうそれを止める者は無かつた。よしあつたにしても、四方の怒罵が、そんな言葉をすつかり打ち消してしまつたらうと思はれた。忽にして燃料は唧筒小屋の前に山積された。薪、藁、炭、俵、それらに初めて火が點ぜられた時、人人は何ともいへない歡呼の聲を擧げた。そしてその聲が霜鏽のした朝雲に消え失せて行く時、その人人の輪の間から、ぬるぬると太い煙が騰り初めた。昨夜から絶えて見ぬ焰が、鼻の先だけは赤いけれども、その他の處は青白く興奮した人人の顔を照した。

「どんどんくべろ。うんと焚け。家でもなんでも燃してしまへ。誰かがまた叫んだ。

するとその時である。今まで聲を潜めてゐた風が、何處ともなく空を奔つて、龍卷のやうに火の周圍を吹きめぐつた。火は長い焰の手を、生きてゐるやうにへらへらと伸ばして、忽ち唧筒小屋を舐めた。ほんの一瞬時である。人人は呆然として、手を翳したままそれを見てゐた。

唧筒小屋の焰は更に大きかつた。そして後にいひ傳へた話によると、その火の中から八羽の火喰鳥が飛び出して、八方に火屑を運んだのであつた。やがて其處には明けきらぬ空の静寂の中に、八本の火の柱が音もなく立ち昇つた。それ

霜多あんや
の夫せん朝霜

るり(鑄)

は恰も燻色の銀板へ、赤い珊瑚を鑄りつけたやうに動かなくかつた。

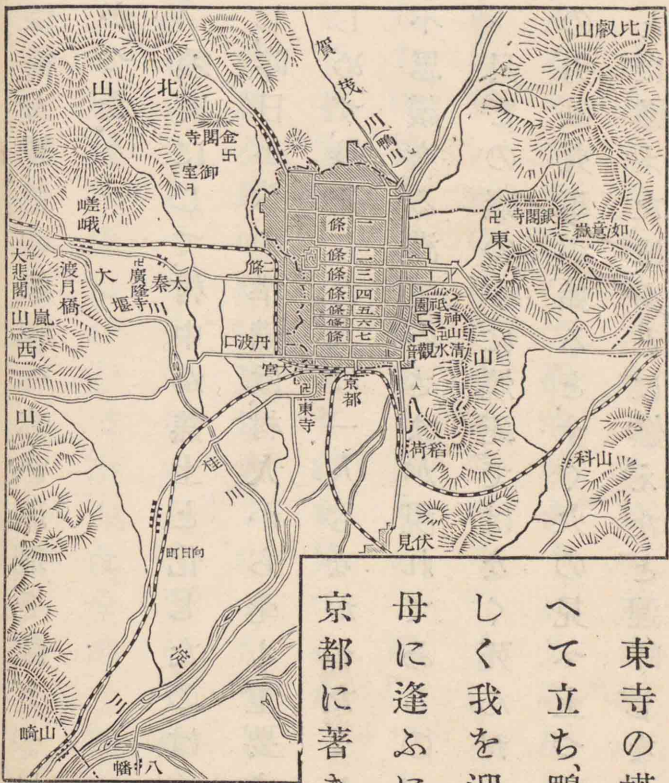
須臾にして、村中が焦土と化したのはいふまでもない。然し、昨日からの準備は、村人から毫も重要な家財を火に奪はしめず、焼死した人は一人もなかつた。そして村人の顔には、不思議なる満足のさまが現れてゐるのだつた。

只この騒の中に、焼死ではなく死んだ人が一人あつた。この男は火事が始ると、すぐ火の見へ上つて見てゐたが、ほんとに燃えた、ほんとに燃えた」と連呼しながら、不意にそこから飛び下りたといふ話であつた。それは雇員の平吉であつた。(久米正雄―手品師)

久米正雄
文學者。長野
縣上田市の
人。明治二十
四年生まる。
東京帝國大學
英文科出身。

三二 京都の春

東寺
教王護國寺といふ。京都市下京區にあり。眞言宗總本山。
鴨川
愛宕郡の山間より發し、京都市の東部を貫流す。



東寺の塔は睦じく我を迎へて立ち、鴨川の水はなつかしく我を迎へて歌ふ。最愛の母に逢ふに似たるは、いつも京都に著きたる時の心地なり。
山紫に水明なるところ、唯夢の如く、現の如く、三

如意が嶽
比叡の一支峯。俗に大文字山といふ。

清水觀音
清水寺の本尊。千手觀音なり。

條を渡り、四條を渡ること、日に幾たびぞ。躑躅を柴に折り添へていただきつれたる大原女も、いつしかわが友となれるが如し。如意が嶽より吹きくる春風は、軽くわが袖を拂ひ、又



大原女

の堂前を充しつ。舞臺の上より見下す人、舞臺の下より咲き誇る花、恰も一幅の畫の如し。姥はこの間に立ちて、蕨餅召せなど呼ぶ。しばし憩ひて眺め渡せば、淺黄に、藍に、霞み渡れる

八幡 京都府綴喜郡
山崎 同府乙訓郡

神山 祇園の八阪神社の北

ほのほ(燄)

御室 仁和寺をいふ。眞言宗。葛野郡花園村にあり

八幡、山崎の邊も面白きに、東寺の塔を松の間に墨がきなせる筆の力こそ工なれ。

燈火の影は水に映りて星の如く、花の如し。祇園の夜櫻看んとする人は神山へと向ふ。一もとの老木は枝を垂れて篝

茶車

茶車
むろのうらり 茶のやまろ 茶車

筆 樹建田和大

火の燄に護られ、寒からぬ雪は雲なき空よりこぼれて顔を撲つ。田樂を賣る聲、茶を勸むる聲、この花の前後に山彦を反し來れり。

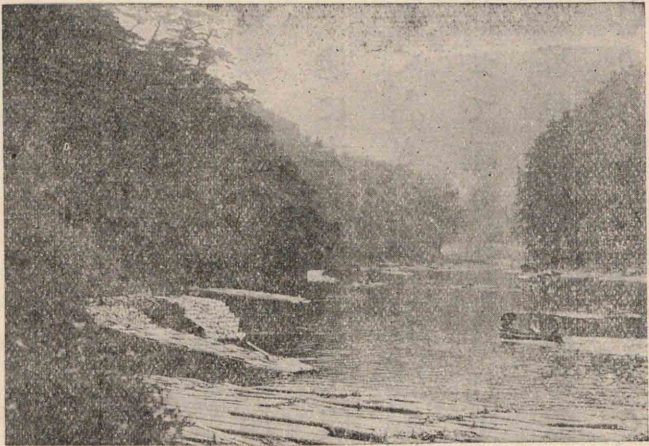
西山の花見る人は、多くまづ御室を指す。松青く、樓門赤く、

樓一樓

うぐひす(鶯)

嵐山 葛野郡松尾村にあり

大堰川 桂川の上流にして嵐山の麓を流る



茶煙絶え絶えに颯りて、花きはめて白し。塔は霞を洩れて松

風の外に聳え、鐘樓は昔を説きて香雲の中につつまる。誦經の聲遠く響きて、鶯の歌とこしなへに高き梢にあり。

かさなる岩根を踏みしめて立つ松、その間を點綴して咲きほこる花、嵐山の春こそ今闌なれ。小舟に乗りて漕ぎゆく人あり、岸のこなたにて眺むる人あり。一すぢの渡月橋は、錦のごとき袂を載せて、この大堰川を横ぎり行か

大悲閣

嵐山の山腹にあり。千手觀音を安置す。柳櫻をこきまぜて

古今集、素性法師、見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりけるし。

大秦

葛野郡。廣隆寺。眞言宗。推古帝の朝、秦河勝建立。

叡山

比叡山の略。京都の東北に峙つ。

あはし(淡)

しむ。水清く、岩を洗ひて玉と碎け、山しろく、塵を離れて空にかがよふところ、この美はかの美と相映じて自然の彩色をなす。阪を登りて大悲閣に至れば、眼下に展げられたる一幅の圖、柳櫻をこきまぜて恰も西陣を織りいだせるが如く、又友禪を染めなせるが如し。

途に大秦を過ぎて廣隆寺を訪ふ。夕陽靜に鐘樓の瓦を染めて、春もの寂し。茶店あれども客來らず。老媪は落花を風に任せて睡り、兒童は仁王尊に紙礫を打ち著けて去る。

暮色は東山を籠め、叡山をめぐり、やうやう鴨川に襲ひ來れり。人影黒く、燈影淡く、天地ただ平和にして、四顧ただ寂寞たり。かへりみれば西山もなく、また北山もあらず。

(大和田建樹「雪月花」による)

大和田建樹

國學者。愛媛縣の人。高等師範學校、女子高等師範學校等の教授たりき。明治四十三年十月歿す。(二五七年—二五七〇年)

加藤司書

勤王家。名は徳成。筑前藩の家老。慶應元年十月幕府の嫌疑を受けて自殺す。(二四八〇年—二五二五年)

二川相近

筑前の人。幕末の人。大隈言道の師。

三三三 ただの人

加藤司書

ふり野の山ともさきさき

花がさうはばしれや

雪我兄弟もねがひ

ふり野の山ともさきさき

二川相近

花よりあはれさきさき

春のあけがたの 夕まはば

こころもこころも

大和ごころなわが

熊澤菴山

雪れくるは月の光

風のちかき花のあ

そらへのあはれ

月と花は

三四 安宅

春のはじめ
文治三年二
月。

辨慶
武藏坊と號
す。(一八四
九年)
安宅

石川縣能美郡
にあり。但當
時の關の址
は、今海中に
陥りたりとい
ふ。

先達、安内者

案内

了知る
了解する
道す
取次が

時しも頃は春のはじめ、風まだ寒き北國路を、いたはしや
義經は、兄頼朝の疑をうけ、奥州さして落ちて行く。主從僅に
十二人、辨慶を先達せんたつに、山伏姿に身を竄し、日數程經て加賀の
國、安宅の港に著つきにけり。

義「いかに辨慶旅人等のうはさによれば、安宅には特に關
を設けて、山伏をきびしく取り調ぶるよし、如何にすべ
きぞ」。

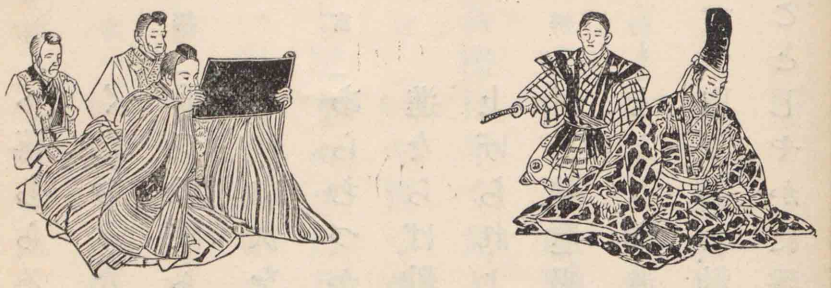
辨「これはゆゆしき御大事なり。きつと、これにて御工夫あ
るべし」。

人人「いやいや、何程の事かあらん。ただ打ち破つて御とほり
あるべし」。

本寺の少寺より
破る、もつてあるから
大事をする前
辨一弁
には山伏も油断
してはなすまい

辨「いやいや、打ち破らんは易けれども、大事の前の小事なれば、成るべく穩なる手段を取りたし。」
義「然らば辨慶、ともかくもその方の工夫に任せん、よろしく計らひくれよ。」
辨「畏つて候ふ。まづ考へ出したることは、我等かく山伏に身をやつせども、包み難きはわが君の御品格なり。畏ながら、暫く強力に御身をやつされ、御笠深く召され、我等の笈を負ひて、わざと後にさがつて御とほりあれかし。さなくば忽に見出され候はん。」
義「げにげに、これは尤の事なり。」
姿をやつし主従は、やうやく關に近づきて、通らんとすれ

東大寺建立
治承四年、平
重衡に焼かれ
し故の再建な
り。



能 辨「承つて候ふ。これは奈良東大寺建立の爲に、北陸道を勸進する山伏にて候ふ。」
安 富「それは殊勝の事なれども、山伏なるからは、この關は通しがたし。」
宅 辨「してそのいはれは」
富「さればなり。頼朝義經御不和により、義經殿には山伏と姿をかへて、奥州

證 証
勸 勸

へ落ちらるる由。故に諸國に新關を設けて、山伏をかた
く止むるなり。一人も通しがたし。

辨 「承つて候ふ。しかし贗山伏をこそ止めらるべけれ。まこ
との山伏を止め給ふ要は候はじ。」

富 「あらむづかし。論より證據なり。まこと東大寺建立の勸
進ならば、勸進帳のあるべき筈ぞ。ここにてそれを讀み
上げられよ。某これにて聽聞せん。」

辨 「何と、勸進帳を讀めとや。心得申して候ふ。」

もとより勸進帳のあらばこそ。笈の中より在合せの卷物
一つ取り出し、勸進帳と名づけつつ、即智を以て文を綴り、ま
ことしやかに聲高高と、天も響けと讀み上げけり。富樫つく

づく聞きすまし、

富 「最早疑は晴れて候ふ。御通り候へ。」

辨 「かたじけなく候ふ。」

げにや紅は、園生に植ゑてもまぎれなし。後に隨ふ強力を、
富樫目早く見とがめて、

富 「いや暫く、その強力は通し難し。とどまれ。」

と罵りぬ。すは我が君をあやしむは、一期の浮沈と仰天し、皆
一同に立ちどまる。辨慶騒がずそらとほけ、

辨 「やい強力め。何とて早く通らぬぞ。」

富 「いや、それはこなたより止めたるなり。」

辨 「そはまた何故。」

人の勝たは
せんあらはる

生涯の安危
のわかぬめ

富 「あの強力が姿、義經殿に似たるゆゑなり。」

辨 「奇怪千萬、義經殿に似たりとや。しかいはるる強力めは、一生の名譽ならんが、さりとは腹立たしや。けふのうちに能登境まで行かんと思へばこそ、強力やとひたるに、僅の笈を重げに負ひて、人人に後るればこそ、貴人かとも怪まるれ。憎さも憎し。いで懲してくれん。」

金剛杖をおつ取つて、さんざんに打擲す。

これはと驚く人人を、辨慶目にて制しとめ、尙も激しく打ち据うる。富樫やうやく疑念を釋き、

富 「これは我等が誤なり。その強力には構なし。とくとくとく一同御とほりあれ。」

すうる(据)

虎口

いふに人人ほつと息、毒蛇の口を逃れし思、さらばさらばと立ちあがり、關路をあとしづしづと、奥州さして下りけり。

(坪内逍遙)

最も少イるヲ譜記スル。其ノ他ハイカヒデアアル。

る(井・堰)

- るけた(井桁)
- るづつ(井筒)
- るぜき(井堰)
- るぐひ(井杭)
- るで(井手)
- るなか(田舎)
- るもり(蝶鱈)

る(居)

- るざり(膝行)
- るしき(臀)
- かもる(鴨居)
- しきる(鬮)
- くもる(雲居)
- くらる(位)
- しばる(芝居)
- とのる(宿直)
- とりる(鳥居)
- まとの(團欒)
- もとの(基)

る(猪)亥

- るくび(猪頸)
- いぬる(乾)
- るのこ(豕)
- るのしし(猪)

る(蘭)

- おほる(天蘭)
- ふとる(選)

る(胃)

- る(率る)
- ひきめる(率ある)
- もちる(用ある)

ある(藍)

くれなる(紅)

なる(地震)

うなる(鬚髪)

かたる(乞食)

くわる(慈姑)

あぢさる(紫陽花)

まゐる(參る)

はらる(腹居せ)

せる(所居)

語頭デハヒナイト發音スルコトハナイ。紛レ易イノハイトデアアル。前ニ掲ゲタるノ外ハ皆イデアアル。

ひ

語中語尾デハあトイトヒガ紛レ易イ。るヲ用キル場合ハ前ニ掲ゲタ。次ノイヲ用キル場合ノ外ハヒデアアル。

おい(老)

くい(悔)

むくい(報)

するもの(陶器) いしする(礎)

す(末)

- するひろ(末廣)
- こす(糸稍)(木末)
- う(糸)飢(餓)
- う(糸)植
- う(糸)き(植木)
- う(糸)こ(み)(前栽)
- ち(糸)智慧

語頭デハヘナエト發音スルコトハナイ。紛レ易イノハ系トエデアアル。前ニ掲ゲタ系ノ外ハ皆エデアアル。

系

語中語尾デハ系トエトヘトガ紛レ易イ。系ヲ用キル場合ハ前ニ掲ゲタ。次ノエヲ用キル場合ノ外ハヘデアアル。

え(兄)

- きのえ(甲)
- ひのえ(丙)
- つちのえ(戊)
- かのえ(庚)
- みづのえ(壬)
- え(枝)
- し(す)え(下枝)
- ずはえ(條)

え(江)

いりえ(入江)

ふ(笛)

のどぶえ(吭)

ぬ(鶴)

ひえ(稗)

ひえどり(鴨)

さ(糸)蝶(螺)

なが(糸)轆

は(糸)映

ゆ(糸)え(夕映)

も(萌)

も(糸)萌(黄)

み(糸)外(見)

は(糸)生

ひ(糸)ば(え)(藤)

あ(糸)肖

い(糸)癒

あ(糸)甘

い(糸)断

お(糸)脊

お(糸)覺

こ(糸)越

こ(糸)肥

ま(糸)消

す(糸)儘

ふ(糸)殖

を(糸)む(を)さ(糸)まる(治修) 收藏納

を(糸)さ(糸)大(抵)

を(糸)し(を)し(ど)り(鴛鴦)

を(糸)し(は)か(草)

を(糸)し(ね)(晚)稻

を(糸)し(ふ)(教)

を(糸)し(む)(惜)

を(糸)す(食)治

を(糸)そ(獵)

を(糸)ち(遠)

を(糸)ち(こ)ち(遠)近

を(糸)と(と)し(二)昨(年)

を(糸)と(と)し(二)昨(日)

を(糸)ち(ど)越(度)

を(糸)と(り)囀(媒)鳥

を(糸)ど(る)踊(跳)躍

を(糸)の(斧)

を(糸)の(く)慄

を(糸)ふ(を)は(る)終(卒)了

を(糸)め(く)叫

を(糸)り(檻)

を(糸)り(滓)

を(糸)り(節)

を(糸)り(居)

を(糸)る(折)

を(糸)し(き)折(敷)

を(糸)る(塞)

を(糸)り(葉)

つ(づ)ら(を)り(九)十(九)折

を(糸)ろ(ち)大(蛇)

語中語尾デハおハ用キナイ。紛レ易イノハをトホデアアル。次ノ外ハ皆ほデアアル。

あ(糸)が(ひ)螺(鈿)青(貝)

あ(糸)を(し)あ(を)む(青)

い(糸)さ(を)い(さ)を(し)功(績)

う(糸)を(魚)

か(糸)つ(を)鰓

し(ら)う(を)白(魚)

ひ(糸)を(水)魚

か(糸)を(る)香(薰)

さ(糸)を(竿)棹

し(糸)を(ん)紫(菫)

し(糸)を(ら)し(可)憐

し(糸)を(る)萎

た(糸)を(や)か(嬋)妍

た(糸)を(や)め(手)弱(女)

と(糸)を(十)

ば(糸)を(芭)蕉

ま(糸)を(す)(申)

み(糸)を(操)

し(わ)し(吝) ず(わ)え(條) す(わ)る(坐)

た(わ)い(な)し(痴)鈍

た(わ)し(東)莖(子)

た(わ)む(撓)

た(わ)に(撓)

た(わ)や(か)嬋(妍)

た(わ)や(め)(手)弱(女)

た(わ)ら(俵)

の(わ)き(野)分

は(ら)わ(た)腸

こ(の)わ(た)海(鼠)腹

ひ(わ)鶉

ゆ(わ)う(硫)黄

よ(わ)し(弱)

か(よ)わ(し)弱

い(わ)し(弱)

じト書ク語ヨリヂト書ク語ノ方ガ少イ。次ニアゲル他ハジヲ用キル。

ぢ(父)

お(ぢ)伯(父)叔(父)小(父)

ぢ(ぢ)爺(祖)父

ぢ(路)

こ(う)ち(小)路

す(ぢ)筋

う(ぢ)氏

ひ(ぢ)臂

あ(ぢ)味

あ(ぢ)は(ひ)味

あ(ぢ)鱈

か(ぢ)梶

か(ぢ)鍛(冶)

ひ(ぢ)泥

ふ(ぢ)藤

ふ(ぢ)ば(か)ま(藤)袴

こ(う)ち(麴)

く(ぢ)ら(鯨)

こ(と)ち(琴)柱

ね(ぢ)螺(旋)

ね(ぢ)く(拗)

あ(ぢ)さ(る)紫(陽)花

ち(ぢ)む(縮)

なん(ぢ)(汝)

も(ぢ)ち(紅)葉

わ(ら)ぢ(草)鞋

な(め)く(ぢ)蛞(蝓)

み(そ)ぢ(三)十

よ(そ)ぢ(四)十

い(そ)ぢ(五)十

む(そ)ぢ(六)十

づト書ク語ヨリずト書ク語ノ方ガ少イ。次ニアゲル他ハ

大正十五年七月五日 文部省檢定 中國教科書

大正十四年十月二十五日印
 大正十四年十月二十八日發
 大正十五年二月十一日訂正發行



發行所

東京市神田區錦町一丁目
 振替口座東京四九九一番

印刷者

株式會社 明治書院
 電話 神田(25) 二六六九 六九五番

發行者

東京市神田區錦町一丁目十番地
 株式會社 明治書院
 取締役社長 鈴木友三郎

編者
 補修者

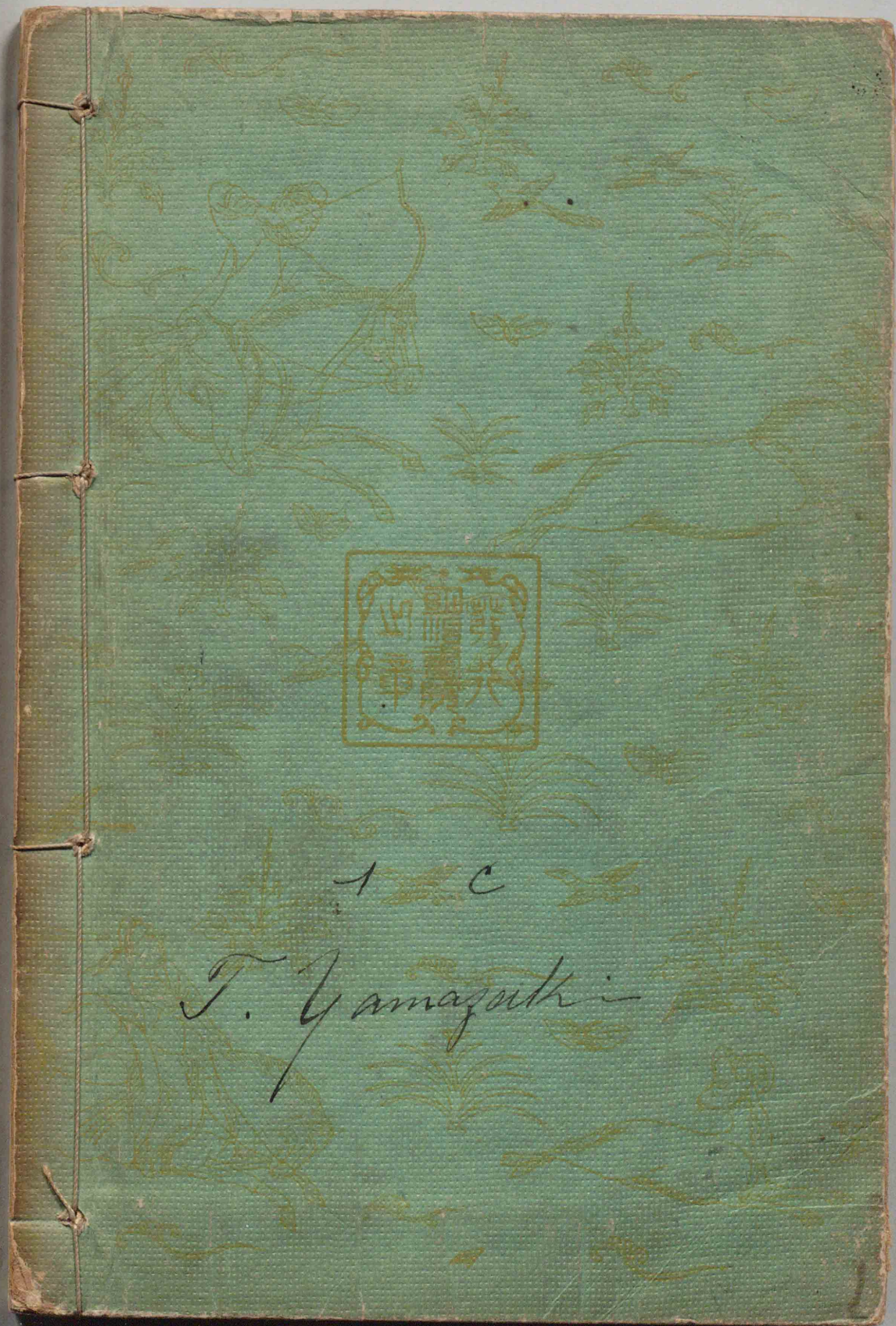
落合直文
 金子元臣

中等國語讀本(新修一版)

定價	自卷一各金四拾貳錢	昭臨	自卷一各金六拾六錢
自卷七各金參拾六錢	至卷六各金參拾六錢	昭和六年定	自卷七各金五拾七錢
至卷七各金參拾六錢	至卷七各金參拾六錢	年度價	至卷七各金五拾七錢

國語讀本一覽

第一編	第一編(普通)	第一編(普通)	第一編(普通)
第二編	第二編(普通)	第二編(普通)	第二編(普通)
第三編	第三編(普通)	第三編(普通)	第三編(普通)
第四編	第四編(普通)	第四編(普通)	第四編(普通)
第五編	第五編(普通)	第五編(普通)	第五編(普通)
第六編	第六編(普通)	第六編(普通)	第六編(普通)
第七編	第七編(普通)	第七編(普通)	第七編(普通)
第八編	第八編(普通)	第八編(普通)	第八編(普通)
第九編	第九編(普通)	第九編(普通)	第九編(普通)
第十編	第十編(普通)	第十編(普通)	第十編(普通)



1 C

T. Yamaguchi